



# 静岡の言語と民俗

～県東部にスポットをあてて考える～

堀 博文+辻本侑生  
静岡大学地域創造教育センター（編）

# 静岡の言語と民俗

## ～県東部にスポットをあてて考える～

静岡大学地域創造教育センター（編）

### 講座1

方言からわかること——日本の方言・静岡の方言

堀 博文

3

はじめに／日本語の方言／静岡県の方言／方言はどのよう  
うにできたのか／方言の現在／まとめ——変容する方言／  
質疑応答

### 講座2

現代民俗学から考える静岡県東部の日常と文化

辻本 侑生

27

はじめに／現代民俗学とは何か／静岡県東部の民俗研究  
のこれまで（主に伊豆半島）／静岡県東部の現代民俗学  
／まとめ／質疑応答

本書は、静岡大学地域創造教育センター（地域人材育成・プロジェクト部門）の主催により、以下の要領により行われた東部市民講座「静岡の言語と民俗」の講演録である。

- ・日時：2025年6月21日（土）13:00～16:15
- ・会場：プラサヴェルデ



講座 1

# 方言からわかること―日本の方言・静岡の方言

堀 博文

はじめに

## †自己紹介

静岡大学の堀と申します。今日は「方言からわかること―日本の方言・静岡の方言」といったタイトルでお話します。

簡単に自己紹介しますと、静岡大学人文社会科学部の言語文化学科というところに所属しています。出身は三重県津市です。静岡県の出身者ではありません。

私の専門は言語学です。言語学といっても、ただ漫然と言語のことについて考えているということではなくて、具体的に何らかの言語を研究しているわけですが、今日は静岡の方言について話をするとおきながら、実は私は静岡県の方言を専門としているわけではありません。カナダの先住民のハイダという人たちがいるのですが、その言

語の研究を三十年ぐらい、ずっとやっています。今日は、ハイダの紹介は簡単にとどめておきたいと思います。

ハイダ族の人たちが住んでいるのは、アメリカ合衆国のアラスカ州南東部、それからカナダの西側のブリティッシュ・コロンビア州です。日本からだとはバンクーバーまで飛行機で飛んで、そこから北のほうに向かうとハイダ・グワイイという島があります。かつてはクイーン・シャーロット諸島と言っていましたが、二〇一〇年に、ハイダ・グワイイというのが正式な名称になりました。そのハイダ・グワイイに、学生時代からほぼ毎年、夏のあいだに通って文法研究をずっとやっています。

ハイダ語という言葉は、話者が百名未満といわれています。今日の講座の定員が八〇名と伺いましたが、これぐらいの人数の話者がいるとは思えません。私の感覚ですが、おそらく二〇人か三〇人ぐらいで、しかもほとんどが八〇

歳以上の高齢の方という状況です。ユネスコなどで言われている、いわゆる危機言語の一つです。端的に言えば、今いらっしゃる八〇歳以上の方が亡くなってしまえば、その言語を話す人がいなくなってしまうだろうというような状況です。

ハイダ・グワイイは、比較的緯度が高いところにありますので、雪がたくさん降るだろうと思う方が多いと思いますが、このあたりはいわゆる暖流が流れ込んでいるので、冬でも比較的温かな気候になるようなところですよ（写真1）。北西海岸地域といわれるところにいる先住民はトーテムポールを盛んに作っているのですが、その中でもハイダ



写真2 トーテムポール  
(筆者撮影)



写真1 ハイダ・グワイイ（スキドゲット）  
の風景（筆者撮影）

族は、最も素晴らしいトーテムポールを作っている民族だと個人的に思っています（写真2）。

というわけで、ハイダの研究をしている人間が静岡の方言について話をするというのはいかがなものかと思われる方もいらっしゃると思いますが、私が静岡の方言に関してまったく関わっていなかったわけではありません。静岡市に油山、松野、津渡野というところがありますが、その口頭伝承を今から二〇年ぐらい前に集めたり（山本節研究室・堀博文研究室（編）『静岡県静岡市油山・松野・津渡野の口頭伝承』静岡大学人文学部言語文化学科、二〇〇四年）、静岡方言に関する文献目録（森口恒一・堀博文（監修）／二橋万知子・原沙絵子・深澤由香・望月華子（編）『明治以降の静岡県方言に関する文献目録』静岡大学人文学部言語文化学科、二〇〇六年）を作ったりしました。

また、静岡市内の方にご協力いただいて、学生たちと一緒に五、六年ぐらいの間、方言調査を行ない、今から十数年ぐらい前に堀博文・滝川史明（編）『静岡県静岡市千代田方言の記述研究』（静岡大学人文社会科学部言語文化学科、二〇一四年）という報告書を出しました。

#### ◆ 本日の内容

さて、今日の内容ですが、最初は日本語の方言の全体的

な話をします。次に静岡県の方言について述べるつもりですが、今回の講座が「東部について考える」ということなので、東部の話を少ししようと思います。ただ、東部に特徴的な方言というのがどれくらいあるかという点、不勉強で申し訳ないのですが、ないといえはなし、あるといえはある。あるといった場合には、それが東部に特有のものなのか、それとも、中部、西部、いわゆる静岡県全体に広まっているものかどうか、その辺の見極めはなかなか難しいところですよ。

この中で、東部ご出身の方はどれくらいいらっしゃるんですか。ほとんどの方ですね。そうすると、私が話すと「いや、それは違うだろう」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、「違う」というのは私にとっては非常に貴重な情報ですので、ぜひお聞かせいただきたいと思っています。それから、そもそも方言はどのようにできたのかということはなかなか難しい問題ではありますが、そのような話を次にします。あとは方言の現在ということ、今、方言というのはどういった状況に置かれているのか、今後方言はどうなっていくのかということ、まとめの中でお話ししたいと思っています。

## 日本語の方言

### 十方言区画

まずは日本語の方言ですが、東条操という方が一九五三年、今から七〇年くらい前の論文で、日本全体を方言によって分ける方言区画論を出しています。方言区画というのは、結局、方言の境界がどこにあるのかという問題で、いろいろな説があります。いわゆる定説というものがあるわけはありません。ただ、よく引用されるのは、東条操先生の方言区画です。

東条操先生は、旧制静岡高等学校の教授としてしばらく静岡にいらっしやった方です。今の静岡大学につながる旧制の静岡ですが、そこで教鞭をとっていらっしやった方です。

さて、その東条先生によりますと、日本語の方言は東部方言、西部方言と大きく分かれ、さらに東部方言は東北や関東に分かれます。静岡県はどこに入るかというと、東海・東山方言といわれる辺りに入ると言われています。特に、静岡と長野と山梨の三県は比較的共通する特徴が多いということ、**「ナヤシ方言」**、長野のナと山梨のヤと静岡のシを合わせて**「ナヤシ方言」**とすることがあるくらい近いと昔から言われています。

また、東条先生の区画論では、琉球方言というのがありますが、最近の研究では、「琉球方言」と言わずに「琉球語」と言うのが一般的になっています。今では、それが北琉球と南琉球に分かれ、さらに北琉球のほうは奄美と沖縄に分かれています。方言と言語の区別は非常に難しい問題で、それについてもここではあまり詳しくは触れませんが、今では日本語と琉球語を分けるのが主流のようです。

#### † 東西方言の「漸移地帯」<sup>ぼんばい</sup>としての静岡方言

静岡県の方言の特徴として、東西方言の「漸移地帯」と言われることがよくあります。すなわち、東から西に向かっていったときに、だんだん東の特徴が薄れていって西の特徴が増えていくというように徐々に移り変わっていることを「漸移地帯」と言います。これは、静大の教育学部にかつていらした中條修先生という方言学の有名な方がおっしゃったことです。

静岡県内では、日本の東西の方言の境界線とみられるものはいくつか見られます。例えば、命令の形として「起きろ」であれば、「起キロ」と言うのが東日本的、それに対して「起キヨ」と言うのが西日本的というように言われています。ですが、その境界が富士川あたりにあると言われています。

それから、否定の形として「行カナイ」と言うか「行カン」と言うか、この境界はもう少し西の方、大井川辺りにあると言われています。あるいは、形容詞の連用形、「白くない」とか、「白くなる」とかといった場合に、「白ク」と言うか、「シロー」と言うかということですが、その境界はさらに西の方にずれます。

また、断定の形では「雨ダ」と言うか「雨ジャ」と言うか、さらに動詞の完了の形として「買ッタ」と言うか「コータ」と言うか、これはもつと静岡よりも西の方にずれるわけですが、このように東と西を分けるような線が静岡県内をたくさん走っているわけです。

#### 静岡県の方言

##### † 静岡県の方言区画

それでは、静岡県の方言について話をします。まず、静岡県の方言区画はどのようなになっているかというと、東部、中部、西部、井川という四つの方言に分けられています。これは文法的な特徴とか、あるいは音声的な面での特徴を基にした方言区画です。

東部は富士川辺りが境になっていて、ここから東側が東部方言と言われています。また、富士川以西から掛川以東

の辺りが中部方言と言われている、そこから西側が西部方言ということになります。この区切り方はおそらく昔の国境くにざかいとは一致していないと思います。何か地理的な要因もあって、このような分け方をしているのだと思います。

井川方言というのは静岡市の北側の方です。ここは昔からかなり特殊な方言であると言われていて、ハ行の子音をパ行で発音することがあります。例えば「花」は「パナ」と発音することです。この井川方言は、かなり変わったというか、昔の日本語を保持しているという、そういった特徴を持っている方言です。ただ、最近の調査によりますと、このような井川方言に特徴的なものがどんどん失われつつあるようです。

#### † 静岡県東部方言の特徴

##### 1 アクセントと発音

アクセントをみますと、東部の方言は、東京と大体似ていると思います。言語学では一拍名詞、二拍名詞といった言い方をしますが、一拍とは簡単に言えば仮名一文字に相当する単位です。一拍名詞には、例えば、「絵（エ）」という単語があります。それから、「柄」も「エ」と言います。両方とも同じ「エ」ですが、例えば、「絵」であれば、「絵」が掛かっているのよう「絵」に「ガ」を付けると、「エ」

が高くて「ガ」が低く発音されます。

しかし、「柄」の場合をみると、「柄が長い」と言った時は、「エ」が低くて「ガ」が高く発音されます。これは、東京と同じアクセントです。二拍名詞の「箸」とか「橋」のアクセントの区別も東京とおそらく変わりがないと思います。

ところが、三拍名詞、つまり、三文字の名詞の中には、東京とちよつとずれるものがあります。例えば、「朝日」は東京では「ア」が高くなりますが、東部のアクセントでは「サ」が高くなります。同じように東京で「命」は「イ」が高くなりますが、東部では「ノ」が高くなります。今の方々はどうかわかりませんが、少なくとも四十年くらい前の記録ではそのような違いがあると書かれています。

他に「油」などは東京では平板式と言って、「ア」が低く、その後は上がりつばなしで発音されますが、東部の方言では、「油」や「すだれ」は真ん中が高くなります。このように語中が高くなるようなアクセントを中高型なかだかと言います。

もう一つ、「白い」という形容詞をみますと、東部の方言では東京と同じく終止形は「ロ」が高くなりますが、「なる」をつけると「シ」が高くなります。要するに、終止形では真ん中が高かったものが「なる」がつくと、アクセン

トが頭に移動するという少し面倒な規則があるというわけです。東京も同じアクセントです。

ところが、中部方言、すなわち富士市よりも西で掛川市より東の方言では、終止形は東部と同じアクセントなのですが、「なる」がついた連用形でも「ロ」が高い中高型のままで発音されます。つまり、東部や東部方言にあった面倒な規則がなくなり、「白い」でも「白く」でも同じアクセントで発音されるということです。

ただ、最近では、東京でも「なる」をつけると「シ」が高くなるのではなく、「ロ」が高くなるという人が増えてきました。もしかすると、皆さんの中にも「ロ」が高くなるという方が多くいらっしゃるかもしれません。

こうしてみると、何となく中部のほうに変化を先取りしていたという感じがしないわけではないですが、要するに、少し複雑な規則が働いていたものを、後ろに「なる」がつかうがつかまいが、単純にすべて中高型にするという、多分そのような変化が起きたということだと思います。それが東京でも今、起きているということが言えると思います。

それから、発音の面についてみてみますと、例えば、「はがき」という単語を発音するときに「が」の子音を「[g]」という音声記号で表記されるような発音をするか、あるいは鼻にかかるようないわゆる「ガ行鼻濁音」（音声記号では「[ŋ]」

と表記される）で発音するかという違いがあります。静岡県内では、かつては鼻濁音で発音をする人が結構多かったような気がしますが、最近の学生の発音を聞いてみると、静岡県内の出身者であっても、鼻濁音を使わない人が増えてきているような感じがします。

ちなみに新居町（今の湖西市）では「ゴハン（ご飯）を食べてガッコー（学校）に行く」という時に、「ゴハン」の「ゴ」、「ガッコー」の「ガ」をガ行鼻濁音で発音していただらしいのですが、今では多分そのような発音はしていません。

## 2 文法

文法については、サ行の五段動詞がイ音便化するという現象、それから意志表現と推量表現で「べー」を使うということについて述べたいと思います。

ちなみに、先ほども言いましたが、「行く」の否定を「行かない」と言うか「行かん」と言うか、これは大井川が境となっていて、大井川よりも東側が「行かない」、西側が「行かん」のように西日本的な言い方をします。大井川というのは、静岡県内における民俗や芸能の面でも東西の境目になっていると言われています。

(1) 五段サ行動詞のイ音便化

まず、サ行動詞のイ音便化について簡単に説明します。サ行の五段動詞というのは「出す」という動詞がそれです。皆さん、なんとなく国語の授業で習った記憶があると思いますが、「出す」のいわゆる連用形は「出した」となります。しかし、「出シタ」とならず「出イタ」となるのがイ音便化という現象です。同様に「話す」の場合は、連用形「話シタ」が「話イタ」となります。このような現象が神奈川県境から愛知県にかけて広くあります。

全国的に見ると、イ音便化は中部から北陸地方に見られます。静岡県内では、「ダイタ」と言う地域が多いのですが、他にも「デァータ」や「ジャータ」、「ダイケ」など、イ音便化したような言い方が結構広まっているようです。これは、二〇一〇年から二〇一五年、今から一〇年以上前に、原則として七〇歳以上の方に聞いた調査によるものですので、もしかしたら皆さんの中にもこういった「出イタ」「話イタ」「起コイタ」と言う方がいらっしゃるかもしれません。この現象の全国の分布をもう少し詳しく見てみると、イ音便化は、近畿にはなく、その両側の地域にあります。近畿地方のあたりでは「出シタ」「話シタ」というように「シ」で発音しています。一説には、歴史的にみれば、近畿地方でもサ行動詞のイ音便が盛んに行なわれていたようで、「出

イタ」「話イタ」「起コイタ」のような言い方が一般的だったのが、関東方言の影響によって分かりませんが、近畿地方では「話シタ」「出シタ」に変化し、周辺の地域で残ったと考えられているようです。

余談ですが、富山県でも「出シタ」に対して「出イタ」という言い方をするので、人を食事に誘うときには「今晩出イテやる」と言うことがあるそうです。方言を知らない人は何のことだと思えますが、「今晩（食事代を）出してやる」という意味で「今晩、ダイテやる」と言うのです。方言を知らない人が聞いたら、あらぬ誤解をしそうな表現ですが、そのように実際に使われているのです。もしかしたら、静岡県の東部でもそのように使われているかもしれませんが、もし使っているということがありましたら、ぜひ教えていただきたいと思います。

(2) 意志表現

次に意志表現について述べます。例えば、「さて新聞でも読もう」に対する表現として、県の東部（富士川以東や伊豆など）では「読むべー」という言い方が広く見られます。この「べー」は古典語の「べし」からきているとされています。

例えば、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』には「こんな

しゆ、いるならうちくれべい。そんないぜによヲ、くれさるか」というのが出てきます。「こんた」というのは「この方」と言う意味、「しゆ」というのは、静岡ではよく「若い衆」という言い方をしますが、その「衆」だと思えます。「いるならうちくれべい」は「欲しけりややるよ」ということで、この「べい」は意志を表わしています。「そんないぜによヲ、くれさるか」は、「その代わり銭をくれるか、くださるか」という意味だと思えます。

ここでは触れませんが、「ぜによヲ」というのは、おそらく「銭を」ということだと思えます。いわゆる格助詞の「を」は、前の名詞と融合することがありますが、この「銭よヲ」というのは、その現象を表わしているのだらうと思えます。このような助詞が前の名詞と融合する現象は東部に限らず静岡県内で広く見られます。

その「読むべー」という表現についても少しみてみますと、静岡県東部を中心にみられると言いましたが、この言い方は静岡県に限定されているわけではありません。神奈川県や山梨県東部、そして群馬県から東北地方とかなり広い地域にかけて「読むべー」という形式が使われています。言い換えると、「読むべー」の西の端がだいたい静岡の東部ということです。東日本に広くみられることから、この「べー」という表現は「関東べー」と少し蔑んだよう

な言い方で呼ばれていて、古くから関東地方では「べー」というのがよく使われていました。

では、静岡県の東部以外の地域では「読もう」をどのようになんのかというと、「読まず」や「読まずカ」、あるいは「ズ」ではなく「ス」になって「読ます」「読ますカ」というような表現が広く聞かれます。先ほど出しました『東海道中膝栗毛』で見ると、三島の地元の女性が「ドレむかひにいかズに」（迎えに行こう）という言い方をしています。

さらに、同じく『東海道中膝栗毛』の割注という本文の中に入っている注を見ると、「すべてこのあたりより、するがえんしうかけ川あたり迄は、行ふといふ事をゆかずといふ、くはふといふ事をくはズといふ。」という記述があります。「このあたり」というのは三島のことですが、「この辺りより駿河、遠州、掛川辺りまでは『行こう』ということ『行かず』と言ひ、『食おう』ということ『食わず』と言ひ」と言っています。

ご存じの通り、十返舎一九は今日の静岡市の出身で、東海道を行く中においてご当地の方言をいろいろと混ぜているわけですが、それがどれくらい信憑性があるのかという点は議論のあるところです。いずれにせよ、三島は「べー」を使う地域とされていますが、果たしてどうでしょうか。

それから、ある文献によると、「読ます」という言い方が函南町で使われているとありますが、『静岡県方言辞典』（静岡大学方言研究会（編）、吉見書店、一九八七年）では「ヨムベー」「ヨムベーク」が使われているとなっており、食い違いが見られます。

「読ます」の「ズ」は意志や推量を表わす「むとす」が「むず」になり、それがさらに「んず」という形を経て「ズ」になったと言われています。「むとす」が「むず」になるのは、平安時代の『枕草子』にもみられると言われており、実は古くからあったようです。

### （3）推量表現

続いて、推量表現を取り上げます。例えば、「雨が降るだろう」という表現に対し、東部、伊豆ではやはり「降るべー」という言い方をするとされています。その辺りで「降るべー」という形式が広く使われているということです。

実際に文献でも「べー」というのはよく出てきます。静岡と関係ありませんが、『蜻蛉日記』には「影も見えがたかべい事などまめやかに」という記述があります。この「見えがたかべい」は、「見えがたし」に「べー」がついているのだと思います（意味は「姿も見るのが難しいだろう」）。その他にも『東海道中膝栗毛』には、蒲原で「あったんべ

い」という言い方が見られます。蒲原というと、東部や伊豆よりも西のほうになりますが、実際にそのような言い方がなされていたのかどうかは分かりません。

いずれにしても、東部、伊豆のほとんどの地域では、推量と意志が同じ「べー」という形で表わされるということになるのですが、一つ注目したいのは、西伊豆町にあるとされている「降るダンベー」という表現です。この「ダンベー」という形式は、伊豆の中でも西伊豆町でだけ使われています。『東海道中膝栗毛』にも馬子のセリフとして「たった三里廿四五てもあるだんべい」といった言い方が出てきます。これは、釜ヶ淵という沼津の近辺の馬子のセリフです。あくまで創作ですので、実際に当時使われていたかどうかは分かりませんが、「ダンベー」という形式が出てきます。

この「ダンベー」という形式は、推量を表わす専用の形式です。ということは、西伊豆では推量と意志を表わす形式をちゃんと区別しているということです。一方で、推量と意志が同じ形式で表わされるというのは、何か不自然な感じがします。もともと、英語でも It will rain tomorrow というように、「雨が降る」という推量を表わす場合に使用される will が I will go to school のように「私は学校へ行くつもりだ」のように意志を表わすのにも使われますので、

意志と推量を同じ形式で表わすというのは様々な言語で見られることだと思いますが、西伊豆では推量と意志を分け、「ダンベ」 という推量を表わす形式が発達したということとです。

この「ベ」 と「ダンベ」 が東日本においてどのように分布しているかを見てみると、「ベ」 が使われているのは、大まかに言うと、東北から北関東の地域、そして神奈川です（今この辺りを「A」とします）。この地域では「降るベ」とか「降るべ」という表現が使われています（「ベ」と「べ」の違いは今は無視します）。一方、「ダンベ」（降るダンベ）という形式は、関東中部、群馬から埼玉を通って千葉辺りまでみられます（今この辺りを「B」とします）。「A」はいわば関東地方の周辺、つまり、その真ん中にある「B」を挟み込むような感じになっています。このような分布の仕方をABA分布といいます。

このような分布をする場合、方言学では、外側（A）にあるほうが古い形式で、真ん中（つまりB）にあるほうが新しい形式だと推測します。これは後でまた説明しますが、そう考えると、やはりBの地域に分布する「ダンベ」という形式は比較的新しいと言えます。おそらくこのBの地域においても、かつては推量を表わすのに「降るべ」という言い方をしていたけれども、あるときから「ダンベ」とい

う形に変わってしまったということです。先ほどお話しした西伊豆町で確認されている変化というのは、そういうことだと思います。このようにして意志と推量が分化するということが起きたという推測ができるわけです。

「雨だるう」を「雨ダンベ」と言うのは栃木から神奈川の辺りに広く見られます。おそらく「雨」などの名詞に付く「ダ」に「ベ」が付いて「ダンベ」という形式ができたわけですが、それが名詞に付くだけでなく、動詞のほうにも付くようになり、「降るべ」から「降るダンベ」となったのではないかと推測されます。このように、本来は名詞と動詞で使い分けられていたものが同じように使われるということについては、また後で説明します。

静岡県内でみられる推量表現には他に「降らズ」や、「降るズラ」、「降るラ」というのがあります。「降らズ」は川根本町や島田など、主に中部、西部で使われていて、静岡市内では「アノヒター（あの人は）コズヨ（確かに来るだろうよ）」という言い方が記録されています。「あの人は確かに来るだろう」と言うのに「ズ」を使うか「ラ」を使うかについては、中條修先生は「ズ」のほうが確実性が高く、「ラ」はそうでもないというような違いがあるとお書きになっていますが、いろいろな解釈があるようです。

それから、「降るズラ」の「ズラ」という形式ですが、

これも最近ではあまり聞かなくなったような気がします。むしろ「ダラ」に変わってきているのではないかと思いますが、これはまた後で説明します。もう一つ、「降るラ」というのは、県内のほぼ全域で使われているそうです。今でも「降るラ」という言い方は、実際によく耳にします。

方言はどのようにできたのか

#### ↑中央のこぼからの伝播

方言がどのようにできたのかは、なかなか難しい問題ですが、まず、その要因の一つとして、中央から言葉が伝播していったということがよく言われています。

例えば、カタツムリを表わす語形の分布図を細かく見ていくと、「デデムシ」という形式が近畿地方、「マイマイ」という形式が東海から関東地方に分布しています。これだけを見ると、西日本では「デデムシ」、東日本では「マイマイ」と、まるで東西の対立であるかのように思われるわけですが、実際には「マイマイ」は更に西のほうの中国地方や九州北部でも使われます。

さらに、「カタツムリ」という形式は関東から東北地方にかけてあり、また西のほう（四国や九州南部）にも分布しているということで、東西で完全にきれいに分かれてい

るわけではなく、東西に同じ語形が分布しているようなパターンになっています。それを日本地図の上に示してみると、大体、真ん中あたりにあるのが「デデムシ」、その周りにあるのが「マイマイ」、その外側にあるのが「カタツムリ」、さらにその外側にあるのが「ツブリ」、「ナメクジ」というように同心円状の分布をしていることが分かります。

このような分布の仕方を、方言学の世界では「周囲分布」と言います。このような分布をしている場合に、どのような推測が成り立つかということ、同心円の一番外側にある「ナメクジ」という語形が一番古い形であり、外側から内側に向けて「カタツムリ」を表わす語形が変わっていったと考えられます。すなわち、外側から「ナメクジ」、「ツブリ」、「カタツムリ」、「マイマイ」、「デデムシ」と分布しているので、一番古いのが「ナメクジ」、それから「ツブリ」「カタツムリ」というように変化していった様子が読み取れるということです。

結局、中央（この場合は東京ではなく、京都あたり）で新しい語形ができ、それがその周辺に徐々に波及していくというようなことが起きたので、周辺部には結局古い形が残ったという考え方です。

このことは文献においても確認できます。例えば「カタ

ツブリ」という言い方は『新撰字鏡』という平安時代の漢和辞書にも出てきていますし、「マイマイ」という言い方は江戸時代初期の文献に出ています。また、「デダムシ」というのは『物類称呼』という江戸時代の方言辞書に記録されており、このように「カタツムリ」の語形の変遷は、文献でも追うことができます。ただし、文献に記録されているような言い方はあくまでも文章語であることが多いので、当時の人が果たして実際にそのように言っていたのかどうかは、なかなか推測が難しいです。しかし、そのような文献には出てこないような語形が方言に残っていることがありますので、方言は日本語の歴史を知る上でとても貴重な手がかりをもたらすことがあります。

この「方言圏論」を唱えたのが柳田國男という有名な民俗学者です。柳田國男は最初、この説をいくつかの論文に分けて発表したのですが、最終的に『蝸牛考』という本の形にまとめ、その中で「方言圏論」という説を打ち出しました。当時、柳田國男は、「カタツムリ」を何とか聞くために、あちこちにアンケート用紙を郵送するとう非常に単純な調査を実施し、そうやって全国から集められてきた語形が同心円状の分布をしていることに気づいたのです。

そのような分布をしていることによく気づいたなと私は

思います。この方言圏論がこのような単語の変遷を明らかにするのに強力な手段であるというように、柳田國男は自信を持っていたそうです。ところが、カタツムリはうまくいったけれども、全部の単語について説明がつくかという、やはり周囲分布を成さないような、いろいろな事例が実はたくさんあり、そういう事例が出されるにつれて、柳田國男は、方言圏論はダメだったと、後年自身の説を否定したと言われています。しかし、方言語形が、先ほど説明したような分布を成している場合には、外側が古く内側が新しいという方言圏論は、いろいろな場合において適用されています（先に述べた「ベ」と「ダンベ」の例も参照）。

このように、外側に古いものが残るといことは、古くは本居宣長が「すべて田舎には古の言の残れること多し」と言っているように、昔から知られていた事実といえます。

#### ↑それぞれの地域における独自の変化

それぞれの地域において独自の変化が起きた結果、それぞれの方言ができたということも考えられます。その一例として、静岡県内の推量表現を見てみます。共通語では「雨が降るだろう」、「暑いだろう」、「雨だろう」というように、動詞に付こうが、形容詞に付こうが、名詞に付こうが、す

べて「だろう」一つで済ませています。

ところが、静岡県内では、まず第一段階、つまり、比較的古い時代においては「降るラ」「暑いラ」のように、動詞と形容詞に対しては「ラ」が付くのに対し、名詞には「雨ズラ」のように「ズラ」が付いていました。静岡県、山梨県、長野県、つまり、先ほど言いましたヤナシ方言では、大体共通して、動詞と形容詞には「ラ」、名詞には「ズラ」が付くという使い分けがありました。

ところが、次の時代になると、「ラ」のほうはそのまま同じですが、「ズラ」のほうは「ダラ」に変わってしまいました。この時代においては、動詞と形容詞には「ラ」が付くけれど、名詞には「ダラ」が付くようになってしまったということです。

それが、今度は「ダラ」が動詞と形容詞にも付くようになり、名詞にはダラだけではなく「ラ」も付くようになってきたという、そのような変化が今起きています。すなわち、「降るダラ」、「暑いダラ」、「雨ラ」という言い方をすることです。この「雨ラ」という言い方は、もしかしたら若い人だけかもしれませんが、やはり聞いてみると「雨ラ」という言い方があるそうです。非常に面白いと思います。

このように、それぞれの方言において変化が生じると、それと近い関係にあった方言がそれぞれ互いに異なった様

相を見せるようになり、その結果、一層大きな差異へと広がっていったということがあったと思われれます。

#### † 共通語化

いわゆる共通語というのは、全国どこでも通じる共通の言葉のことです。一方で、標準語という言い方もありますが、厳密に言いますと、日本には標準語というものは存在しません。標準語というのは規範となる言語ということですが、国立のアカデミーなどのような組織で決められた規範があるわけではありません。

NHKが使っているのは標準語であると思っている人が多いと思いますが、それは標準語というわけではなくて、共通語という位置づけになっていると思います。また、標準語という言い方をすると、方言は非標準語なので間違っているということになってしまうので、標準語という言い方をせずに、共通語というのが一番中立的な表現だと思います。

共通語化という現象は今、いろいろなところで起きていくわけですが、共通語化は多くの場合、教育やマスメディアなどの言わば上からの影響によって、だんだん地元の方言がなくなってしまうって画一化に向かうことを言います。その共通語化がどのくらい起きているのかということですが

が、ここでは語彙の面に限って見てみます。勿論、共通語化は語彙の面に限ったことではなく、音韻やアクセント、文法など、いろいろな面で起きているわけですが、単語において共通語化がどのようになっていくのかについて述べたいと思います。

国立国語研究所が今から五、六十年くらい前に出した『日本言語地図』という地図があります（地図はインターネットで見ることができます）。その地図を作成するための調査自体は昭和三十年代に行なわれたものですが、その地図が収録している八二の語彙項目に関して、共通語形が使われている割合を明らかにした研究があります。例えば「頭」とか「目」とか、「食べる」などの単語に対して、その地域の方言ではどういった形を使うのかというのを聞いたときに、共通語と全く同じ形が出てきた割合を調べたということです。

その研究によりますと、全国平均は二七％で、当然ながら東京が六一・六％と最も高いわけですが、逆に沖縄（二三・三％）や鹿児島（一六・一％）ではかなり低くなります。日本全体を見ると、東京周辺は共通語との一致度が高く、北へ向かう、あるいは西のほうに向かうとだんだん低くなっていきます。これは井上史雄先生という方がおっしゃっているのですが、鉄道距離と大体比例するそうで

です。ですから、首都圏からどんどん離れていくと、共通語化があまり進んでいない。逆に、近いところは共通語化がどんどん進んでいるというようになります。静岡県は五二・五％ですから、八二の語彙項目のうち約半分ぐらいが共通語と同じ形になっていると言えます。

このように共通語の影響の受け方も地域によって差があり、それがまた方言の違いとなって現われることがあると言えます。

## 方言の現在

### 十 新方言

#### 1 新方言

先ほど言いましたように、共通語化が進み、方言的な特徴が失われるということはあるのですが、一方で、新しい方言形というのが出てくることもあります。それを井上史雄先生は「新方言」と命名されて、一九七〇年代ぐらいからその研究をなさっています。

「新方言」というのは、従来の方言形とは違った新しい方言形です。最初は地域の若者が使い始めるのですが、若者が年長者になってもそのまま使い続け、それを次の世代の人も使うことで、その地域の方言形となって定着してい

くものです。それに似たものとして、流行語というのがありますが、流行語は一時だけです。つまり、若者が使うけれど、その人が年長者になると使わなくなるとか、次の世代では使われなくなるといふ単語のことをいいます。ただ、流行語か新方言かを見極めるのは非常に難しいです。

新方言の例として、「ウザツタイ」や「カッターライ」というのがあります。この「ウザツタイ」とか「カッターライ」というのは、もともとは東京の多摩地区の方言です。ですから、東京多摩地区においては、昔から老いも若きも「ウザツタイ」とか「カッターライ」といった言い方をしていたわけです。それが一九八〇年代の調査によると、東京二十三区内の若者も使うようになった、つまり、そういう多摩地区の言い方が二十三区内で一般的に使われるようになり、更に、それが全国に広まったということです。

これは、東京二十三区内の若者の言葉が直接全国に広まったということではなく、東京都の西の多摩地区という山梨に近いようなところの方言が広まっていったということとで、単なる流行語ではなく、「新方言」の例と言えます。

ただ、「ウザツタイ」も「カッターライ」も、もともと多摩地区のお年寄りたちが使っていた本来の意味とは少し違って使われているらしいです。更に、今度は「ウザイ」とか「タルイ」といった言い方が二十三区に入って、それ

が全国に広まってきました。

それから、「アオタン」という言葉も新方言の一例とされています。この「アオタン」というのは、もともとは北海道の方言ですが、東京多摩地区から首都圏に広まっていったそうです。これは、一説には、北海道で炭鉱が閉山され、その労働者が多摩地区に移住し、その移住した人たちが「アオタン」という言い方を広めたということらしいです。

「アオタン」は打ち身でできた痣のことですが、この単語が使われるようになったことで、たまたまぶつけてできた場合の「痣」と、本来的な意味の「痣」、例えば、いわゆる蒙古斑のようなものを区別することができるようになりました。つまり、単に「痣」といった場合はどちらの「痣」か分からないけれど、「アオタン」と言えば、「打ち身でできた痣」ということが分かるようになります。つまり、それら二つの意味を分けることができるようになったということです。

それから「ジャン」。「この間、一緒に行ったジャン」などと言う時の「ジャン」で、この由来についてはいくつつか説があるようです。山梨か静岡辺りで古くから使われていた「ジャン」が横浜に入り、横浜銀蠅というグループがいました。そういう人たちが使うようになって全国に広

がっていったようです。

## 2 静岡県内の新方言

静岡県内の新方言にはどういったものがあるかという  
と、「よかった」という意味の「エーツケ」がそれに当た  
るようです。老年層は「ヨカツケ」と言います。また、「面  
白かった」に対して「オモシロイッキ」、それから、「私た  
ち」のことを「アタシツチ」と言います。この「ツチ」は  
学生たちもよく言っています。「先生ツチも大変だね」の  
ように言うわけです。

他にも「お休みください」を「休マレテクダサイ」など  
のいわゆる敬語的な表現や、「レ足すことば」といって、「書  
ける」という動詞に対して「書ケレル」というように、「レ」  
を入れてしまうようなのが静岡県内の新方言としてあげら  
れています。

### † 気づかない方言

もう一つ、気づかない方言というものがあります。要す  
るに、方言を使っている人が、それがその地域独特の表現  
だということに気づかず、全国どこでも通じると思いつい  
でいるようなものです。それには大きく分けて二種類あり、  
一つは現代において新しく発生した地域差のもの、もう一

つは現代において新しく発見された地域差です。

## 1 現代において新しく発生した地域差

具体的にいくつか例を挙げてみます。「模造紙」のこと  
を静岡は普通に「モゾーシ」と言うと思いますが、「ビー  
シ（B紙）」（愛知、岐阜）とか「ガンビ（雁皮）」（富山）  
とか「タイヨーシ」（新潟、福島、鳥取、高知、熊本、鹿  
児島）など、地域によって呼び方が違います。「モゾーシ」  
というのは、比較的最近導入されたもので、古くからあつ  
たものではありません。このような新しく導入されたもの  
に対して、地域ごとの差が見られることがあります。

また、「救急絆創膏」のことを何と言うかというところ、お  
そらく「バンソーコー」とか「バンドエイド」が一般的な  
言い方だと思いますが、北海道では「サビオ」、東北では  
「カットバン」、それから九州では「リバテープ」と言うよ  
うに、地域差があります。このように地域によって呼び方  
が異なるのは、もともと救急絆創膏は会社によって商品名  
が異なっていたからです。つまり、その地域で売られてい  
た救急絆創膏がどの会社のものであるかによって、地域ご  
とに異なった名称として定着したということです。

## 2 現代において新しく発見された地域差

ある地域では古くから使われている言葉なので地元の人たちは分かっているけれど、それが何らかのきっかけによって、ある地域に独特の言葉であるということが「発見」されたような場合もあります。それには大きく分けて、共通語と形式が同じであるけれども、用法が異なる場合と、そもそも共通語にはない形式の場合の二通りあります。

(1) 共通語と形式が同じであるが、用法が異なるもの  
例えば、「グレル」という言い方があります。この形式そのものは、今では日本どこでも使われていると思います。「うちの子、グレちゃって」などと言われると、私などは、素行の悪い子どもであると思ってしまう。しかし、静岡の方言では、そうではなくて、「捻挫する」という意味で使われています。静岡県の人は分かるでしょうが、そうでない人は私のような誤解をさせていただきます。

また、「今から、シャテーが来る」と言うと、「この人、紳士っぽい風貌の方だけど、実はあっちの世界の人だったのか」のように思ってしまうが、「シャテー」というのは、静岡では「弟」という意味で使われているようです。もちろん静岡県だけではなく、東北地方や、近いところでは神奈川でもそのような言い方をしていたという記録

が残っています。一方、「妹」のほうは県内全域で「妹」で、共通語と同じです。

それから「背中かじって!」という表現があります。私が想像するのは、そう言われた人がガブッと背中に噛みつく様子ですが、静岡では「背中を搔く」という意味です。静岡県内の人は、この「カジル」というのが方言だと気づかない人が多いらしいです。どこかよその地域に行って「背中をかじって」と言うと驚かれますので気をつけましょう。

他には「皮サラ食べる」という言い方、これは「皮ごと食べる」という意味で使うそうです。やはり「サラ」というのも全県で使われているようですが、よその地域では通じないと思います。

それから、静岡では、給食などを食べた後に「いただきました」と言うそうです。私は「ごちそうさまでした」と言いますが、食べる前に「いただきます」と言っていて、食べた後に「いただきました」と言うのは、確かにその通りなのですが、静岡県出身ではない人にはちよつと違和感がある表現だと思います。

他にも「もうご飯食べたツケ」という言い方がありますが、他人に対してこのように尋ねるのは東京でも同じですが、自分が食べたのに「もうご飯食べたツケ」と言わ

れると、「この人、自分にご飯を食べたのを覚えていないのか」と思ってしまう。あるいは、「昨日、面接を受けたさ」といった時の「さ」の使い方、これは、東部の人は結構使うらしいです。しかし、静岡市とか中部の人は「受けたさ」という言い方はあまりしないらしいです。ですので、東部出身の学生が中部の人に「受けたさ」と言うのと、「何それ？」と言われることがあるらしいです。ちなみに、このような「さ」は、東日本でもよく使われているようです。

他に、文全体にかかる音調（イントネーション）ですが、「昨日行っただよー」の「だよー」を下がり音調で言うのも静岡の方言的特徴だと思えます。これもよそから来た人は、そのイントネーションを聞いてびっくりするようです。

このような共通語でも同じ形式でありながら、用法が共通語と異なるものは、形式が同じであるだけに、なおさら方言であることに気付きにくいようです。それは、自分がよそに住んだり、他の方言の人から指摘されたりすることによって、方言であることに初めて気付くわけですが、そのような機会がなければ、全国どこでも通じると思ってしまうのではないかと思います。

(2) 共通語と形式（用法も）が異なるもの

先ほど述べたのは、形式が共通語と同じだけれども、用法が異なるものでしたが、共通語と形式も異なる、つまり、共通語にはない形式でありながら、方言であると気付かないものをいくつか取り上げます。

例えば、「ちゃーつと」と言った時の「ちゃーつと」というのは「早く」という意味です。静岡県の人は分かるとは思います。私などは、「ちよつとやってしまおう」という意味に思ってしまう。こういった擬態表現にも方言的な違いがあるのですが、その方言の人たちは、よそでも通じると思ってしまうことが多いと思えます。

それから、コップなどの水に溶かした砂糖などが底に残ることを「コドム」とか「コズム」などと言うのが県内では広く見られるようです。これは沈殿した状態のことを言いますが、県内でも地域によって多少違いがあります。

一九九四年から一九九五年に、「沈殿すること」を何と尋ねたアンケート調査があります。それをみますと、「シズム」のように全国に広がっている共通語形が静岡県内でも使われていますが、「コズム」や「コドム」といった言い方は若年層でも使っていることが分

かります。つまりそれだけ方言であるという意識が低いのだと思います。

他に、「隅<sup>すみ</sup>」を表わす「コバ」「クロ」も静岡で広く使われていますが、他の地域では通じないと思います。それから「ミルイ」という言い方は静岡県の方言として代表的なものとしてよく取り上げられます。「柔らかい」とか「(人が)若い。未熟」という意味です。「未熟」というとちよつと蔑んだような感じがしますが、必ずしもそういう意味ではありません。これらも他の地域では通じませんが、何となく形式が方言らしくないためか、静岡の人は、方言であると意識していないのではないかと思えます。

### まとめ—変容する方言

#### †現代方言の諸相

##### 1 残る方言的要素

方言は、いろいろな要因が絡み合ってどんどん変わっていくものです。そうすると、方言というものは消えてしまふのではないかと思われるかもしれませんが、そうではなくて残ることは残ると思います。

では、どのような方言が残るかという点、小林隆先生

によれば、感覚や感情に関わる語彙は比較的どの方言でも残る傾向にあるそうです。例えば、仙台では「イズイ」とか「メンコイ」といった言い方がありますが、これは若者でも普通に使っています。静岡の方言で感覚や感情に関わるものとしては、「マメツタイ」や「セツナイ」などがそれに当てはまると思いますが、このような表現は、多分この先も残っていくだろうという気がします。先ほどの「ミルイ」もそうです。

それから、「バカ(面白い)」というように強調を表わすような言い方も頻繁に使われていますので、この先も残っていくと思えます。

他にも、相手に強く働きかける対人的な文法形式や挨拶も残りやすいそうです。静岡方言では、先ほど言った「(ダ)ラ」とか「ジャン」、そして東部の人は言わないと聞きましたが、「ごめんツケね」とか「ありがとうツケね」は残るのではないかと思います。例えば、「この間はどうもありがとうございました」というときには「ありがとうツケね」と言うわけです。共通語では、過去のことに対してお礼を言う時は、「ありがとうございました」のように丁寧表現しかありません。

また、先ほど述べた「気づかない方言」は比較的残りやすいですし、使用頻度が高い表現、例えば「ダモンデ」、

それから、先ほどの「先生ツチ」というような表現は、この先も残っていくであろうと思います。

## 2 方言の「普及」

方言は失われる一方ではなく、実は方言の「普及」という現象があります。つまり、様々な場面で方言が使用されるようになっていくことです。例えば、トマトの商品名として「アメラ」や、万代醸造さんのお酒に「うめえら!」という方言が使われています。

また、静岡市内に「来・て・こ」という名称の施設があります。これは、健康文化交流館という生涯学習センターの一つですが、その名称の「来てこ」は「来てごらん」という意味の方言です。それから、「のへそ」という静岡駅にある居酒屋さんの看板には「うめくら」と書かれています。このように、商品名や施設名、看板などにも方言が使われ、方言に接する機会が増えてきたように思います。

更に、「方言グッズ」といったものもたくさん見られるようになりました。例えば、「静岡人オンラインシヨツプRA?」というのがあります。何が売られているかというと、「ら?」と書かれたキーホルダー、「ら」だけではなく「ずら?」というのもあります。また、車に貼る

ステッカーとして「子供つちが乗ってるもんで」というものがあります。これも方言の普及に一役買っていると言えます。

方言というのは、従来は耳で聞くだけのもので、書き言葉として使われることはあまりありませんでしたが、最近では、書き言葉だけでなく、打ち言葉として方言がたくさん使われるようになってきました。また、これまでは何かを発信するとすれば、テレビや雑誌などに限られ、個人が自由に発信できる環境はあまりありませんでした。しかし、インターネットが普及した今では、メディアによらなくても、SNSや動画サイトなどを使って、個人がどんどん発信できるようになりました。そうやって自身の方言を使って直接発信することができるようになり、受け取るほうも受け取るほうで、ドラマや漫画などの創作物として作られた方言ではなく、生の方言が直接聞けるという、そういった環境ができてきました。要するに、共通語の普及は、マスコミという、いわば「上」からの影響でしたが、今は、SNSなどの横の広がりによる方言の普及が見られるようになってきていると思います。

## ↑方言は残るのか

### 1 使用場面における共通語と方言の使い分け

さらに方言が残るのかということを考えたときに、きつと私たちは使用場面によって共通語と方言を使い分けることをやっていくのだらうと思います。つまり、私的な場面や「親」の関係にある人たち、顔なじみの人たちに対しては方言を使い、そうではない場面やそのような関係にない人には共通語を使うということがあるわけですが、そうした場合には、やはり共通語といっても全国共通の画一化された共通語ではなくて、その土地の共通語を使うということもあるでしょうし、やはり共通語の影響を受けた方言を使うのだらうという感じがします。

### 2 変わる方言

方言のどの部分が残りやすくて、どれが残りにくいのかというのは難しい問題ですが、先ほど例としてあげた「ダラ」とか「ありがとうツケね」といった挨拶的なものをあえて使うというのは、方言の象徴的な使用にあたると思います。つまり、方言を体系として使うのではなくて、個々の要素をそういった一種の「キャラ付け」的なものとして使うことが、この先もずっと続くのだらう

という気がします。それは私が研究しているハイダ語でも同じことで、ハイダ語は全然しゃべれないけれど、頻繁に使われる挨拶言葉や決まり文句なら言えるという人は結構多いです。そういったところに、方言が残っているのだらうと思います。

結局、言語あるいは方言の機能とは何かということですが、よく言われるような、伝達の道具ということだけではなくて、その言語あるいは方言を話す人たちの歴史であつたり、アイデンティティであつたり、物の見方であつたり、いろいろなものが、言語や方言には込められていると思うのです。ですから、方言の話を通じて、言語とは何かとか、方言とは何なのか、そういったことを考えていただければ非常にうれしく思います。

### 質疑応答

質問——本日は面白いお話をありがとうございました。

私は和歌山出身で、静岡の方言にあまり詳しくはないのですが、東西の方言の境というところで質問です。和歌山の方言の特徴は、例えば「ザ行」と「ダ行」が交じるというのがあり、ぞうきを「ドウキン」と言ったりしますが、西伊豆の方の土肥の教育委員会さんが出してい

る郷土の資料『土肥の方言』を見ていたりすると、座敷のことを「ダシキ」と言ったりするなど、西伊豆の方でもそういう傾向が見られるような気がしています。『岩波講座日本語 方言』（一九七七年）にある金田一春彦先生の「アクセントの分布と変遷」ですと、例えば和歌山県でも新宮のほうなどは、京阪型ではなく東京型のアクセントだったりするので、何か海洋的なつながりでもしかしたら東海道沿いではなくて、西伊豆とかとの交流で和歌山と伊豆の方言のつながりがあるのかな、と漠然と思ったりしていたのですが、そのあたり、例えば港の地区に絞ってみていくと、断続的に西日本の方言が静岡の中に飛んでいる地域があるのかな、というところが気になってしまつて質問させていただきました。

**堀**——高度な質問ですね。「ザ行」と「ダ行」が入れ替わるというか、そういった現象というのは果たして影響関係なのか、それとも音声学的な理由があつて、たまたまそれぞれの方言でそういうものが起きたのかというのには判断できませんが、やはり沿岸部で何か似たような方言があるということは、実際にあり得ると思います。ただ、具体的に何かどうかというのは今、例が挙げられません。

**司会**——高度な質問だけではなくて、日常の疑問とかでも結構ですが、皆さんのおじいさんとかが話されていたというものもあるかもしれません。

**堀**——「ここにこう書いてあるけれど嘘だ、私はこう言う」といったものでも全然構いません。

**質問**——先ほどの方と近いかもしれませんが、静岡県だけを見たときで構わないですが、言語地理学の中で特に歴史的な背景や、それから特に交通、交易などの関係、そういうものの影響で、音韻はちょっと難しいかもしれませんが、語彙がいろいろ地域境界ができるということもあると思うのです。今考えられる中で、そういうものの影響というのは、静岡の場合はどうのように考えられるでしょうか。

**堀**——昔の話ですが、やはり川の舟運、つまり、船で行き来するとかつての舟運業の影響で方言形式が川伝いに広がっていくというパターンがあります。それから、大井川の例ですが、昔は上流のほうは険しくてなかなか行けなかつたので、今の静岡市の山のほうから行くという交通路がありました。そのため、大井川の流域で

はあるけれど、上流のほうに行くと、静岡市のほうから入ってきた方言形式がいくつか見られることがあるようです。

鉄道が発達して、その沿線で方言がどのように広がったのかを扱った研究があることはあるのですが、それが県内で果たしてどれくらい顕著に出ているのか、あるいは、それとは別の交通網が方言形式の広がりにもどのように影響しているのかに関する研究は、これからもっと出てくるのではと思います。

**質問**——ありがとうございます。商業圏とか学区とか、そういうものが問題になると思います。

**堀**——それはあります。おっしゃるとおりです。



講座2

## 現代民俗学から考える静岡県東部の日常と文化

辻本 侑生

### はじめに

私の専門は民俗学という分野です。言葉聞いたことがある方は多いと思いますが、実際に動いている実物の民俗学者を見たことがあるという方はいらっしゃいますか。ちらほらいらっしゃいますね。ありがとうございます。ほとんどの方にとっては、生で動いている民俗学者を見るのは初めてではないかと思いますが、日本民俗学会には千七百人ぐらいの会員がいます。非常に生息数が少ない分野なので、今日はそのようなことも紹介していければと思います。私の自己紹介ですが、一九九二年、神奈川県出身です。もともとずっと大学で研究をしていたわけではなくて、大学を卒業してから六年半ほど横浜の企業で働きながら、土日とか夜に研究をしてきました。在野研究者という言い方をしますが、大学などには所属せずに研究をする人が比較的多い分野です。そのような形でやりながら、もう少し研

究をしたい、時間をかけたいなと思って、二十九歳のときに青森県の弘前大学に転職をして、二〇二四年から縁あって静岡にまいりました。雪が降らないところに来たなという印象ですが、静岡生活もまだ一年ぐらいなので、皆さんからいろいろ教えていただければと思います。

少しだけ宣伝させていただきますと、これまで自分だけで書いているわけではありませんが、五冊ぐらいの本を作ってきました。『津波のあいだ、生きられた村』という本は岩手県の、ちょうど三月に山林火災が大変ひどかった地域ですが、東日本大震災の被災地でフィールドワークをして、被災地がどのような歴史をたどってきたのかということ調査をして書いた本です。

『焼畑が地域を豊かにする』という本は、焼畑農業というと南米や東南アジアなど海外を連想されるかなと思いますが、日本でも今もやっている地域はありますし、高度経済成長期の以前は各地で行われていました。静岡県でも静

岡市区井川では現在も行われていますし、伊豆半島でも焼畑でのキヌサヤエンドウ豆栽培が一九九〇年代まで行われており、最近では静岡県内の焼畑のことも調べています。

『生きづらさの民俗学』は、差別やマイノリティなど社会問題につながるようなことも、実は民俗学の視点から捉えられるという本です。『クイアの民俗学』の「クイア」はもしかしたら聞き慣れない方もいらっしゃると思いますが、性的マイノリティを包括的に表す言葉です。これもまたマイノリティとか人権、差別の関わりの問題ですが、そういう現代的なテーマにも民俗学の視点からアプローチしていくといったことを、仲間の民俗学者たちと一緒に挑戦しています。割と節操がないのですが、せっかく静岡にまいりましたので、静岡のこともどんどん勉強していければと思っています。

本日は、そもそも民俗学とはどんなものなのか、ぜひ皆さんにご紹介させていただきたいと思っています。その上で今回、東部に焦点を当ててということなので、東部でこれまでどんな民俗学者たちがどんな研究をしてきたのかということをご紹介したいと思います。

今回、あえて「現代」とつけていますが、民俗学は昔のことをほじくり返している学問というイメージがあるかと思いますが、昔のことでも大切なのですが、それを今起こって

いる問題とつないでいくという意味を込めて、現代民俗学という言葉が使われることがあります。今まさに静岡県の東部で起こっていることや、立ち向かうべき社会課題と民俗学の関係について、最後にご紹介できればと思っています。

### 現代民俗学とは何か

#### 下にわかに注目が集まる民俗学

はじめに民俗学とは一体何なのかということですが、先ほど、生身の民俗学者に会ったことがある方という方はごく少なかったと思います。しかし最近、テレビや何らかのメディアで「民俗学」という文字列を目にしたり、あと本屋さんで目にしたりすることが少し増えてきているのかなと思います。

例えばテレビでは、NHKの「趣味どきっ！」というだるまさんや招き猫など我々の身近な「縁起物」を解説する番組に、イモトアヤコさんと一緒に島村恭則さんという関西学院大学の民俗学者が出演していました。先日、「探偵ナイトスクープ」という番組にも島村先生が出ていたことが、意外と気が付いたら「あれ、民俗学者が出ています」ということもあります。

また、YouTube(動画サイト)には、「ゆる民俗学ラジオ」というチャンネルがあります。研究者ではないけれど、実は学問ファンだという方が結構増えていて、ゆるく民俗学の話について話している動画です。学生に聞くと、意外と知っている人が多く、結構人気があります。動画で民俗学に触れているという方も増えてきています。

一般のイメージで民俗学者というと、フィクションの登場人物で出てくることが多いようです。インターネットで「民俗学者」と打ち込んで画像を検索すると出てくるのは、例えばテレビドラマでは『准教授・高槻彰良の推察』、マンガでは『ミステリー 民俗学者八雲樹』など、事件に巻き込まれて謎を解いていく、といった設定で民俗学者が登場することが多いです。『光が死んだ夏』というマンガ作品は最近アニメ化しますが、これもやはり民俗学者が村の謎を解き明かす登場人物として出てきます。謎を解く探偵のような設定で民俗学者がフィクションに出てくるというのは非常に多いので、僕らも何か謎を解いているのではないかと、というような視線を向けられたりすることがあります。

二〇二四年、飯倉義之さんという國學院大学の民俗学者が『現代思想』という雑誌に「民俗学とホラーの親和性、あるいは民俗学者はなぜすぐに死んでしまうのか」という

論文を発表して、タイトルがインターネット上で面白すぎると話題になりました。すぐに死んでしまうというのは、飯倉さんが学生に民俗学のイメージを書かせたところ、「民俗学者は物語に出てきて、早めの段階で何者かに殺されてしまっている」というコメントを書いてきたことから、それをそのまま論文のタイトルにしたわけです。

これはおそらくフィクションの中で、村の秘密が解かれると困るから、外から入ってきた民俗学者を殺してしまうという内容が多いからではないかと思います。我々民俗学者が実際にやっていることと、いわゆる世間一般のイメージが大分ずれている状況があります。このことについては、私は別にいいかなと思うのですが、今日はどちらかというところ殺されない側の民俗学者が何をやっているのか、ということをお伝えしたいと思っています。

ちなみに、フィクションの中でも比較的民俗学者の実態に即している漫画を紹介するならば、吉川景都さんの『こまったやつら』という漫画(全三巻)があります。これは本物の民俗学者がアドバイザーになっています。一九八〇年代末頃は「民俗学サークル」というものが各地にあり、後でも少し触れますが、必ずしも多くの大学で民俗学の授業が開講されているわけではないので、民俗学をやりたいという人は、しばしばサークル活動の中で勉強したり、フィー

ルドワークに行ったりしていました。この漫画も民俗学のサークルを舞台にした漫画で、実態が正確に描写されていると思いますので、ぜひご覧になっていただければと思います。

さらに最近では、わりと実際に民俗学者のやっている研究が皆さんの目に触れる機会が増えているように思っています。代表的なものが怪異とか心霊スポット、ネット怪談に関する研究です。例えば、及川祥平さんという成城大学に在る民俗学者が『心霊スポット考』という本を書いています。心霊スポットはみんなが肝試しで行く場所ですが、その場所がなぜそうなったのか、なぜ私たちがそういうところに行くのかといったことを学術的にまとめています。とても厚い本ですが、結構売れています。

また、先ほどの『こまったやつら』の監修者である廣田龍平さんが昨年、『ネット怪談の民俗学』という新書を出し、これもかなり売れています。「インターネット怪談」というものがありますが、例えば『きさらぎ駅』という映画を観たことがある方もいらっしゃると思います。この「きさらぎ駅」というのは、代表的なネット怪談です。実は遠州鉄道が舞台といわれていますが、普通に鉄道に乗って家に帰ろうとして、ふと見ると全然違う誰も知らない駅に降りてしまっているみたいな話です。そのような話をネット上

の掲示板に、誰かわからないように書き込むのです。それがどんどん広がっていく、噂話みたいなものがインターネット上で展開していく。そういうものを真面目に収集して分析したのがこの『ネット怪談の民俗学』です。

なお、民俗学は日本だけにあるわけではなく、かなり世界中に広がっています。例えば、Facebookには世界中の若手民俗学者がつながるためのグループもあります。世界で民俗学はフォークロア／フォークロリスティクスと言いますが、世界中の若手民俗学者がつながるネットワークがあり、実は日本だけで完結する学問ではない、ということも特徴になると思います。

#### 十 民俗学とは何か

##### 1 民俗学の特徴

ここまでは、最近の民俗学をめぐってどんなことが観察されるかということをお話ししてきましたが、改めて私なりに民俗学というのとはどういうものかということをお話しさせていただければと思います。

非常に大まかですが、私なりに要約をすると、身の回りの日常的な物事の歴史性、いつからやっているのか、どう変わったのかなど、それから多様性、講座1の方言のお話などもまさにそうだと思いますが、同じ県、同じ地域でも、

こんなに使言葉が違うのだということがあります。このようなさまざまな物事に多様性や歴史性を探求する学問だというのが、私の考えている民俗学です。

民俗学の入門の授業で非常によく使われる代表的な例としては、お雑煮の具があります。お正月にお雑煮を食べるという方は多いと思いますが、出汁が何かとか、鶏肉を入れるのか、味付けは味噌か、お餅は丸か切餅か、焼いたお餅か餡が入っているのかなど、話をし出すと非常に多様であることが分かります。

他方で、民俗学では「餅なし正月」という言葉もあります。お正月にあえてお餅を食べないという習慣を持った地域や家もあるように、お正月に何を食べるかということをとっても、非常に多様です。なぜお餅を食べないのかという話も、実はいろいろな経緯があり、例えばお餅を食べたご先祖様が火事になってしまったから食べないとか、あるいは昔はお米が取れず非常に苦しんだので、先祖の苦勞をしのんで、今もあえて正月にお蕎麦を食べるようにしているとか、いろいろな伝承や歴史があります。

さらにもう一つ、民俗学の代表的な例としてあげているのがお盆の時期です。静岡に来てから、お盆をいつやるかというのがかなり多様だと感じています。一般的には八月のお盆休みだと思います。大学も八月の十五日前後

にお盆休みが設定されて、一斉に休むことにしていますが、例えば沼津ですと七月にやる地域もあるという話を伺いましたし、伊豆の方では八月の一日からやるか、かなり時期が違うようなお話を聞きました。

浜松の方ではかなりお盆が盛んだということで、親しい家の初盆には訪問する習慣があるそうです。浜松の方に聞いたら、浜松のお盆の時期は、夕方になるとよその家のお盆に行くので車が渋滞するという話も聞きました。このようにお盆というものをとつても、かなり静岡の中でも多様で、きっとその中にはさまざまな歴史があるのだろうと感じています。

このようなお正月やお盆、または日々何を食べているかといったことは、些細でそれほど気にも留めないようなことのように言われることがあります。昔、フジテレビでタモリさんがやっていた「トリビアの泉」という、くだらないけれど知らなかったことを聞くと、「へえ」というボタンを押すテレビ番組がありました。実はトリビアも、些細なという意味の言葉は最近、アカデミックなアメリカの民俗学などで重要な言葉とされています。民俗学というのはトリビアな、一見、些細なものに焦点化して、それを深めていく学問なのだとされています。

古典的には、例えばお祭り、信仰、民話、芸能や、先ほ

ど私が扱った焼畑という伝統的な一次産業などに比較的目的が向けられてきましたが、現代民俗学というときにはそれだけではなく、観光とか災害、移民、マイノリティ、福祉など、多様な対象を扱うところが特徴になってきています。

また、民俗学は在野研究者の多さが特徴で、必ずしも民俗学を専門の職業にしている人びとばかりではありません。例えば、日本の民俗学会には千七百人ほどの会員がいますが、そのうち大学に勤めているのは五百人にも満たないと言われていて、私もかつてそうでしたが、例えばお医者さんやサラリーマンなど、仕事をしながら研究を続ける人が多いという特徴があります。そして、地域ごとにたくさん研究会とか学会があるのも特徴です。静岡県には「静岡県民俗学会」という大変伝統のある学会がありますし、例えば山形県だと地域ごとの特徴があるので、確か三つくらい学会があったと思います。福島県などもそうです。

地域ごとに学会があつて、それぞれの地域での研究の情報交換をしているため、例えば学会の研究者の集まりで質疑応答などする場合、「静岡大学の辻本です」など自分の大学名を名乗ってから発言するのが一般的ですが、民俗学会の場合は自分の住んでいるところを、例えば「静岡県の辻本です」と名乗ったりします。どう名乗るか自由なので、今でもそのような習慣が残っていて、それは「自分の

住んでいるところの経験をもとに話しますよ」という意味も込められていたりするわけです。一年に一回開催される日本民俗学会のプログラムを見ると、所属を何と名乗るか非常に自由で、みんな好きなように名乗っています。

私は今、縁があつて大学で民俗学の勉強をしています。どの大学でも民俗学の授業がある訳ではなかったり、あるいは大学にいる民俗学者は民俗学専門というより、違う名目で雇われていたりするパターンが、私もそうですが結構あります。例えば有名な研究者では、お墓のことを研究している最上孝敬さんという民俗学者がいましたが、その人は会計学の専門家で、会計学者として大学に就職しています。

あと、国際的な話では、先程も世界中の若手民俗学者がFacebookでつながっているという話をしましたが、多くの学問は、明治になってから海外から輸入してきたという部分が多く、例えば、基本的にはアメリカやイギリス、フランスにすごい研究の拠点があり、それを勉強するということがあります。しかし、民俗学の場合、もちろんそれらの国々も盛んなのですが、いわゆる相対的に小さいと言われている国でもむしろ盛んという特徴があると言われています。具体的には、北欧のフィンランドやバルト三国のエストニアという国が挙げられます。これには理由がありまし

て、これらの国の共通点を考えてみると、隣接している国がロシアであるということです。これらの国々は、歴史的には帝国ロシアやソビエト連邦と戦争したり支配されるということを経験してきた国です。そのような国々では自分たちの文化が常に脅かされているので、それを記録しておくという強いモチベーションがあるわけです。

私が民俗学の授業を大学でやるときに、私の話を全部忘れたとしても、これだけは絶対覚えて帰ってくださいというところで、「民俗学」と「民族学」は違うという話をしていきます。家族の「族」と混同されることが非常に多いのですが、私が今回お話ししているのは「にんべん」の「俗」の方です。この二つは密接に関係していますが、違う学問です。英語では「民俗学」はフォークロアとかフォークロリスティクスと訳すのに対して、「民族学」はエスノロジーと訳すので、これは違うということになります。これを何回学生に言っても、コメントペーパーに「民族学は面白いです。」と「族」で書いてくるのですが、今日は「民俗学」についてお伝えできればと思います。

## 2 世界の民俗学の大まかな歴史

世界における民俗学の始まりは、一八世紀頃のヨーロッパ、具体的にはドイツであると言われています。ヘルダー

という方が民俗学の始まりのように言われることが多いですが、この人は民謡(歌)を集めていった人です。それから、こちらのほうが多分有名だと思いますがグリム兄弟、グリム童話のグリムで、民話を集めています。また、少し意外なところでは、生物の教科書に出てくる、いわゆる学名の書き方を作ったリンネという人がいますが、この人はいろいろなところに旅行して、フィンランドなどヨーロッパ各地で行われている民俗文化などを記録したりもしていました。リンネのやっていたこのようなことも、民俗学の初期のものに入ります。

日本でも、実は江戸時代に菅江真澄という三河出身の人が、全国を旅してお祭りや習俗を記録するというをやっていましたので、同時代的に日本でもそういう動きがあったということになります。

ではなぜ一八世紀、一九世紀にこのようなことが起きてくるのかということですが、これも先程ロシアの話をしました。が、覇権主義への対抗の動きとして出てきたものと言われています。今ご紹介したグリム童話の時代というのは、ナポレオンがヨーロッパを統一しようとするなど、どちらかというところ全部同じものにしていこうというような、強いものが弱いものを飲み込んでいく、まさに今の社会情勢とつながる部分もありますが、そういう時代でした。そのよ

うな中で、童話や民謡など、遅れた前近代的なものだと言われてしまう、先程の言葉でトリビアルなものだと言われてしまうものにあえて目を向けて、記録しておこうという動きが出てきたのです。その動きとして民俗学がドイツで出てきて、同時代的に日本でも出てきたということです。近代化が進む中で、自分たちの文化を振り返り、記録しようとする動きであると言われています。

ちなみに、フォークロア、民俗という言葉は、一八四六年にイギリスのトムズという人が作ったということです。この辺りは『みんなの民俗学』（島村恭則著）という本の記述を参考にしています。民俗学入門書としておすすめです。

また、『現代民俗学入門』（同）もおすすめです。この民俗学の本がこの前、品川駅ナカのビジネス書ばかりの書店に平積みになっていて驚きましたが、かなり売れているようです。他にも岩波新書で、菊地暁さんという方が二〇二二年に『民俗学入門』という本をお書きになっています。岩波新書はいろいろな学問分野の入門におすすめの本が多いと思います。これらの本はいずれも二〇二〇年代に入ってから出版された非常に新しい本ですが、どれも大変読みやすくおすすめです。もし本屋さん等で見かけたら、ぜひ手に取っていただけたらと思います。

### 静岡県東部の民俗研究のこれまで（主に伊豆半島）

静岡県東部の民俗研究のこれまでということですが、主に伊豆半島の話が多くなると思います。というのも、後で少し出てきますが、修善寺から車で一五分ぐらい走ったところに静岡大学東部サテライトというオフィスがあり、そこに私も二週間に一回くらい通って仕事をしている関係で、わりと伊豆半島で活動することが多くなっています。

今日はこの一年ぐらいで伊豆半島を中心に勉強してきたことの話になるので、どちらかというと伊豆半島等に踏み入れてきた民俗学者の列伝のような内容になります。

#### † 山中共古（山中笑）（一八五〇～一九二八）

最初に取り上げたいのは山中共古さんです。共古はペンネームだったようで、山中笑というのが本名です。この方は一八五〇年、江戸時代末期に東京の新宿で生まれて、一九二八年に亡くなっています。この前、新宿区の博物館に行ったら、この方をとりあげる展示がありました。新宿出身で、牧師として明治初期から静岡、沼津等、転々として勤務されていました。メインの仕事は牧師で民俗学者ではありませんが、その傍らで民俗学の研究をしていました。

後から柳田国男という人が出てきますが、柳田国男が民俗学を体系化するより前の時代の人ですので、日本で民俗学が体系化される前に、静岡県内各地でいろいろな事例を集めていた方ということで、非常に注目される方です。

この方は自分で記録するだけではなくて、この時代の研究者には非常に多いのですが、書簡を通して情報交換をしていました。「私が見たこんな情報がありましたよ」など、人に送り合うということをやっています。特に山中さんが柳田国男とやり取りした『石神問答』は、石などを神様に見立てるのはどのような例があるか、などをやり取りしています。静岡の話も出てくるので、少し読んでみます。

「駿河甲斐にもドンド焼と申す事有之候。駿河にては沼津千本浜のドンド焼は中々盛んなりしもの由なるも今は旧の如くならず候

三月十八日 山中笑

柳田国男様」(『石神問答』『山中共古全集三』)

ドンド焼きは、一月の十五日ごろに正月飾りを神社などで燃やす行事で、今でもあります。沼津千本浜は今もある地名ですが、かつてはドンド焼きがすごく盛んだったけれども、今はそうでもないというようなことを書いています。

この手紙だけではなく、私はこういうところを見たとか、ここではこうらしいなどといったことが、延々と羅列してある手紙をお互いにやり取りし合っていました。

この書簡の宛名が柳田国男だったわけですが、このように情報交換をし合っていたということが、やっとわかってくるのです。今でもこの地域でドンド焼きがあるのかなど、私も少し調べてみたいと思います。この書簡は明治四十年代で、今から百年以上前の情報です。こういった情報と今行われているものを照らし合わせることで、変化がわかったりすることもあると思います。

#### 十 柳田国男(一八七五～一九六二)

次に取り上げるのは柳田国男さんです。講座1では方言学の父として紹介されていた柳田国男さんですが、民俗学の父とも言えるかもしれません。この方はもともと官僚で、農商務省、今でいうと農林水産省とか経済産業省みたいなところに勤めていたのですが、その官僚をやめて民俗学を始めていった人です。

また、柳田さん以前にもバラバラに民俗学のようなことをやっていた人はいましたが、そういう人たちを組織化し、学会のような形を作ったのも柳田国男で、非常に有名な方です。代表的な著作には、岩手県の昔話を集めた『遠野物

『語』や終戦直後の『海上の道』などがありますが、非常に膨大な著作があるので、地域の図書館に柳田国男全集がずらっと並んでいることもあります。どれから読んだらいいのかわからないくらいですが、今回ご紹介したいのは少しマニアックといえますか、あまり有名ではない『五十年前の伊豆日記』という文章が『定本柳田国男集』の三巻に出ています。

これは、柳田国男が明治四十三年に伊豆を旅しているのですが、そのときの記録をすぐに発表はせず、五十年後に文字にしたものです。明治四十三年というと、柳田国男がまさに官僚を辞めて民俗学者になっていく頃で、また『遠野物語』という有名になる本が、そろそろ印刷が終わる頃だったという話もあるぐらいのタイミングです。少し気晴らしに伊豆を旅しようと思ったのかわかりませんが、その一方で、柳田国男は官僚らしい性格を持っていた人なので、いろいろな地域を旅しながら見て回り、この辺りの例えば産業はどうなっているのだろうか、そういう情報収集をするような人でもありました。

柳田国男の文章を少し読んでみたいと思いますが、「明治四十三年五月十八日、曇、水曜日」という文章から始まります。

「明治四十三年五月一八日 曇 水曜日 朝九時の汽車にて大仁まで。青森の人らしき親子四人乗車、修善寺へ行くという。大仁から狩野川の谷を人力車で行く。玄武岩を所々に利用せり。但し但馬城崎のよりは小さな石材なり。」（『五十年前の伊豆日記』（『定本柳田国男集第三巻』）

現在の伊豆箱根鉄道は修善寺まで通っていますが、当時は大仁までで終わっていたということですが、当時も「青森の人らしき親子四人乗車、修善寺へ行く」ということで、相席になった人に聞いたのか、もしくは盗み聞きしたのかわかりませんが、そのようなことを逐一メモしているわけです。汽車から降りると、人力車に乗り換えて景色を観察しています。この但馬城崎というのは兵庫県の城崎温泉です。柳田国男は幼少期、いろいろなところに住んでいましたが、兵庫県にも住んでいたことがあり、おそらくそこで城崎温泉の辺りにも行って、その辺の景色と比べて岩石がどうかということも観察してメモしていたのだと思います。

この先、少しいろいろな文章が続くので端折りますが、五月十八日に湯ヶ島に泊まり、さらに河津町の湯ヶ野温泉に泊まっています。そして、二十日に馬車で湯ヶ野から下田

に行き、ある旅館に着くのですが、そのときの様子をこのように書いています。

「泊めてもよいようにいうから、落ち着いて海を見たり考えごとをしたりしていると、亭主さりげなく庭を歩いて、ちらりてこの様子を見て、飛び込むとでも考えたか、急に断り始めたのでここを発ち、蓮台寺の会津屋というに行きて一宿。」（『五〇年前の伊豆日記』〔定本柳田国男集第三巻〕）

旅館で「今日空いてるよ」と言われたので、部屋に入って海を見て考え事していると、この人は思い詰めて海に飛び込むのではないかと心配をされて、「泊まらないでくれ」と言われてしまい、仕方なく柳田はそこを発って、蓮台寺の会津屋という別の宿に泊まった、ということが書いてあります。

民俗学者は今でも「フィールドノート」といって、フィールドワーク先であったこと、観察したこと、人に聞いた話などを記録するのですが、たまには自分の身に起きたことなどもメモします。柳田国男も同じようなことをしていたのだな、と少し面白く思いました。

翌日、松崎町に行つて泊まり、二十二日に松崎から船で

沼津に行き、伊豆半島の五泊ぐらゐの旅が終わるわけですが、そして、最後は富士市の吉原で先ほどの山中共古さん、すなわち文通をしていた人に会っています。ということでは、即東京に帰らずに沼津に戻ってきたのは、おそらく文通で情報交換をしていた山中さんに会うためだったということですね。そのあと、さらに興津の東海ホテルに泊まっています。蓮台寺の会津屋が今もあるのかは私も存じ上げませんが、こういうものをひとつずつ照らし合わせていくと、かなり面白くことがわかるのではないかと思います。

松崎に丸一日いたときに興味深いことを書いていて、松崎の宿で一緒になった若者に柳田国男は聞き書きをしています。民俗学では、インタビューをしてその結果をノートに書くことを、聞き書きといっています。

「船にのりおくれたれば、ここに一泊。宿は瀬崎の「かじ寅」。相宿は沼津の日野屋の店員。おとなしき若者なり。いはゆる江州店の話を聴きたれば書き残して置く。この日野屋は使用人上下二八人あり。沼津なるは酒と醤油を造る。」（『五〇年前の伊豆日記』〔定本柳田国男集第三巻〕）

「船にのりおくれたれば、ここに一泊」とあるので、船

に乗り遅れたということがわかります。江州というのは近江、現在の滋賀県のことです。いわゆる近江商人のことを指しています。沼津の日野屋というお店で働いている若者と一緒になったので、その話を聞いたということです。この記述のあとにも、近江商人の独特のルール、例えば滋賀県から人が派遣されてきて事業展開することが沼津にもある、といったような話を聞いていきます。

ここで面白いと思うことの一つは、おそらく自分より若い人に話を聞いて記録をしている、というところですね。民俗学というと、自分より年配の方に昔の話を聞くというイメージがありますが、柳田国男はここでたまたま一緒になった若者が近江商人の店に勤めているということで、その話を詳しく聞き、近江商人の家業継承がどういう仕組みになっているのかなどをメモしています。それは恐らく柳田国男が農商務省で、ある種の産業とかにも関わるところに勤めていたこともあると思います。昔のことを必ずしも聞くというわけではなく、今まきに行われている経済などにも関心があったのだらうと思います。

この沼津の日野屋さんが今でもあるのかと思って調べてみたのですが、これと関係があるのかなのかわからない部分がありましたので、何かご存じの方はぜひアンケートに書いて教えていただければと思います。

これらは『定本柳田国男集』で読むことができます。多分、伊豆半島にお住まいの方は読むと非常に面白いと思いますので、ぜひ全文を読んでいただけると嬉しく思います。

#### † 渋沢敬三（一八九六～一九六三）

三人目のこの方もまた有名な方で、渋沢敬三さんです。渋沢敬三は渋沢栄一の孫です。渋沢栄一はお札になっているので有名だと思いますが、銀行家です。その孫なので、当然銀行を継がなければいけないという重大な立場にあつたわけですが、渋沢敬三さんは若い時は生物学者になりました。かたや、大人になってからも草履とか達磨とか漁具などいろいろな「モノ」を集めて分類することに、非常に関心があったのです。

本当は学者になりたかったのですが、渋沢栄一さんに土下座され、「頼むから金融マンになってくれ」と言われて銀行家になります。ただ、朝の六時、七時には起きて、二時間だけは自分の研究をやっていたそうです。また、経済的にはある程度裕福だったということもあり、自分だけでなく研究をするのではなく、若い研究者を支援するという仕組みを作った人です。パトロンなどとよく言われますが、「アチックミューゼウム」という組織を作りました。アチックは屋根裏で、屋根裏部屋の博物館と直訳できますが、そこ

に草履とか達磨などを集めて、研究したい若者を、例えば旅費を出したり、あるいは研究成果を出版してあげるなど、支援をしていました。

洪沢さんは、まさに生活の資料のアーカイブを重視していて、洪沢さんがまとめたものの中に『豆州内浦漁民史料』という、沼津にある漁民の資料があります。これは、洪沢さんが昭和六年に、たまたま沼津の内浦長浜というところに足を踏み入れることになったときの話です。少し読んでみます。

「不甲斐ない話ではあるが、昭和六年一月祖父（洪沢栄一）の逝去した前後、看病から葬式へと約一か月間、睡眠不足が原因をなして急性の糖尿病に罹ってしまった。：昭和七年二月、松濤館に来てしまった。：或る日、漁師の伝次郎君にこの浦の古いことを聞いているうちに、いろいろ面白い節があるので誰か昔のことに詳しい人の話は聞けまいか、と云ったところ…その日の夜、大川四郎左衛門翁が宿へ訪ねてくださり、「こんなものが家に伝わっていて太閤様のものだというがほんとうでしょうか」と云って広げられたのを見ると本書に収録してある天正一八年四月の秀吉の朱印状で…こんなものがお家にまだほかにありますか、ときくと、長持に

いっぱいある、と云うので、それは後日拝見することにしてこの浦の故事を伺った。翁の話は極めて巧みで長くもあった。またその後も度々にわたって或いは浦の来歴を、或いは我が家の歴史を、また或る時は変化に富む数奇な一身の経歴を語られ、その度ごとに時のたつのも夜の更けるのも忘れて聞き入った」（『豆州内浦漁民史料』序）（『洪沢敬三著作集第一巻』）

お祖父さんの洪沢栄一が亡くなり、その後始末をしているときに洪沢敬三さんも具合が悪くなってしまい、療養のために昭和七年二月、沼津の内浦長浜に今でもある「松濤館」という旅館に滞在します。

疲労で休みに行っていたのですが、そこで面白い話がある、しかも秀吉時代の古文書も出てくるということで、その話を聞きたいと言ったら、その古文書を持っている大川家、今でもある大きな長屋もあって文化財になっている家ですが、そこのご主人が来てくれて、何度も何度もお話をしてくれた、という話です。

私も「松濤館」にこの前行ってきました。そこから古文書がある大川家のあたりまで歩いてみましたが、大体十五分ぐらいかかりました。先ほどのおじいさんは、この旅館に泊まって休んでいる洪沢敬三さんのところに、歩いて

十五分ぐらいかけて来てくれたんだというのがわかりました。この辺りは、今はアニメ「ラブライブ！」のファンの方がたくさん歩いていらっちゃって、私はその方々と一緒に「ラブライブ！」じゃなく、洪沢敬三の跡地を巡っていたわけです。

† 内田武志（一九〇九～一九九〇）

さて、次にご紹介するのは内田武志さんという方です。この方は、今まで紹介した方と違って、初めて聞いたという方も多いのではないかと思います。この方は秋田県出身ですが、生まれてからずっと血友病という病気とともに暮らしてきた方で、思うように歩いたりフィールドワークをしたりすることができなくなりました。特に人生の後半は寝て過ごすことが多かったそうです。

内田さんは秋田の民俗学者ですが、実は若い時、一九二四年から十年間ほど静岡に暮らしていました。静岡商業学校に入りましたが、病気が悪化してきたため、中退せざるを得なくなりました。一九三〇年に静岡市の葵文庫講堂で講演していた柳田国男と会います。紹介したのは詩人の蒲原有明ですが、当時、柳田国男は『蝸牛考』で「地域によってカタツムリを何というか」、資料を集めていた時期です。その講演を聞き、自分もそういうことをやり

たいと言って、方言研究に入っていくのです。

柳田の『蝸牛考』は全国のものでしたが、内田さんは静岡県でこれを集めて、『静岡県方言誌』という本にまとめました。この本には、例えば「なめくじを何というか」を静岡中で集めた地図が収録されており、全国の地図よりもさらに細かくなっています。これも自分で集めるのは難しいので、小学校などに協力を仰いでアンケートをして、それを集計するという方法でまとめていきました。少しだけ紹介すると、カタツムリのことを県西部では「マイマイ」と言いますが、東部では「カサツパチ」という言い方ができます。しかし、先日、東部サテライトで「カサツパチと言いますか？」と聞いてみましたが、誰もそのようには呼ばないということだったので、もしかしたら一九三〇年代以降、失われてしまったのかと少し不思議に思いました。いずれにせよ、全国の調査に比べてかなり細かいデータを集めているところが特徴です。

また、ナメクジについては伊豆半島で「ナメクジラ」と言うことがあります。ただ、伊東のあたりでは「マメクジ」と言うなど変化もわかってくるので、これを眺めているとあつという間に時間が経ってしまいます。

十 宮本常一（一九〇七～一九八二）

最後の方もまた有名な方で、宮本常一さんです。この人は柳田国男や渋沢敬三に直接教えを受け、人々の生活に着目して全国を調査して歩いた人です。山口県の周防大島という瀬戸内海の島に生まれ育ちました。晩年には武蔵野美術大学の先生になるのですが、島出身であることから、例えば佐渡島や故郷の瀬戸内海の島々など、島の生活がどう豊かになっていけるのかといった、今でいう地方創生のようなことに尽力した人でもあります。具体的に言うと、離島振興法という法律の制定に関わったというようなことも言われています。代表的な本は『忘れられた日本人』です。宮本さんは全国をいろいろな歩き回っていた人なので、伊豆半島にも踏み入れています。宮本さんが伊豆半島について特に重要なことを言っているなと私が思うのは、「調査地被害」についての話です。これは、私たちが学生にフィールドワークを指導するときに読ませることが多い本です。どんなことを宮本さんは言っているのか、読んでみます。

「伊豆の海岸は若者組が発達していて、若者宿も多い。民俗学の宝庫のような所である。…ところがあつた年、そこにある大学の調査団がやって来た。そして訊問型の調査が行われたらしい。根掘り葉掘り聞くのはよい。

だが何のために調べるのか、なぜそこが調べられるのか、調べた結果がどうなるのかは一切わからない。大勢でどやどやとやって来て、村の道をわがもの顔に歩き、無遠慮にものをたずねる。ところが調査に来たのは、この仲間だけではない、それから一、二年してまた別の大学が、同じようなことを調べに来た。なぜ同じようなことを何べんも調べに来るのだろう、という疑問から自分たちがしていることがひどく古くさく悪いことではないかと思われるようになった。それだけならまだよい、今度は文部省から調べに来たという。これも若者組や若者宿があるからで、若者宿をやめたら調査にも来なくなるだろうということになって、若者宿をやめた村があるということをし、その地方を歩いてきた人たちから聞いたが、真偽のほどはわからない。しかし私には、それが事実のことのように思えた」（宮本常一「安溪遊地『調査されるといふ迷惑』」）

若者組というのは江戸時代ぐらいからあり、一定の年齢になった地域の若者が加入して、「年齢階梯制」といいますが、先輩の言うことには絶対に従って一緒に作業したり活動するという組織です。明治には青年団などがありました。若者宿というのは、若者組の人たちが集まる場所です

が、特に伊豆は若者組というのがかなり顕著に見られる地域で、「民俗学の宝庫のような所である。」と言っています。そこに同じようなテーマを別の大学も調べに来て、例えば実習調査のようなことをやるといったことが言われているのです。

さらに言っているのは「それだけならまだよい、今度は文部省から調べに来たという。」ことで、これは文化庁が『伊豆の若者組習俗（無形の民俗資料記録第一七集）』という報告書を昭和四十七年に出しているので、多分そのことだと思います。

今では大学でフィールドワークをして、いろいろな地域を調べることが行われるようになりましたし、特に地方創生の時代以降、ここ十年ぐらいで、全国各地の大学では地域でフィールドワークをするというカリキュラムが、すごく増えています。若者がどんどん地域に入っていくことで非常に良いこともたくさんありますが、他方で受け入れる方々に見れば、何度も同じような話を聞きに来たとか、結局何だったのだ、と感じることがあるというところで、実は今起こっていることのようにも思えるわけです。そういった観点から、宮本常一が警鐘を鳴らしていたのが「調査地被害」でした。しかも、それが伊豆半島に関することだったというのは、伊豆に関わっている私としては、

常に胸に留めておかなければならないと思って、勉強をしています。

### 静岡県東部の現代民俗学

#### † ジオパークと民俗学

冒頭、司会の山本先生から「静岡県東部は、例えばジオパークなど地形的に大変特徴がある」というお話がありましたが、最近のジオパークに関するユネスコの捉え方は、いわゆる地形や岩石、火山活動などの自然科学的な要素に加えて文化的な要素、例えば信仰やお祭りなどを合わせて捉えていく傾向にあり、ジオパークの中でも民俗学や歴史学の領域にどんどん着目していくことが必要と言われるようになっていきます。

#### 1 伊豆諸島と伊豆半島の信仰に関する研究

そういつた中で行われているのが、伊豆諸島と伊豆半島の信仰についての研究です。地形について私はあまり専門的な説明はできませんが、プレートートの動きによって、今の伊豆諸島あたりから少しずつ海底火山や火山島が動いてきて、本州に衝突して伊豆半島ができ、その後も活発な火山活動によって温泉があるといった、非常に大まかに言うと

多分そのような説明なのではないかと思えます。そこで、伊豆諸島と伊豆半島には何らかの連続性があるのではないかとこの研究が、いろいろ行われています。

例えば、三島市に三嶋大社という神社がありますが、それはもともと三宅島にあった神様が移ってきた、という伝承があります。そのように、伊豆諸島と伊豆半島の信仰がどうつながっているのかということを、神道考古学が専門の國學院大学の深澤太郎先生と、美しい伊豆創造センターという伊豆半島ジオパークの活動を推進されている方々が一緒に研究されています。その成果を國學院大學博物館で「三嶋の神のモノガタリ」焼き出された伊豆の島々」として特別展を開催したり、このゴールデンウィークには東京駅近くで「伊豆の歴史と三嶋大社」という展示を開催したりしていました。

その他、昔の修験の道を、研究者も関わって、今歩けるようなルートで復元した『伊豆半島ジオパークトレッキングガイド2…古の道伊豆峯辺路を歩く』という本も出版されました。まさに信仰のような民俗学が扱う部分に関して、ジオパークと連携した活動が行われているのです。

## 2 金山に関する研究

火山活動などの影響で、金山が非常にたくさんあるのが伊豆の特徴と言われていますが、そのような自然地理、地質的な部分に加えて、産業としての金山、鉱山の研究があります。

民俗学は伝統的な農業や漁業の研究が多く、鉱山のような産業の研究というのは相対的にあまり多くありません。むしろ、こういう研究は地元の研究者が先駆的に取り組んできました。土肥の在野研究者の水口為和さんという方は、ずっと伊豆の金山の研究を進めて来られました。具体的には、例えばどういうときに金山が発見されて採掘されだしたのか、といった伝承もそうですし、「友子制度」という日本各地の鉱山にあった制度などを研究していました。

これは鉱山で働く人たちの徒弟制、親分子分のような関係のことで、初めて金山に働くというときには弟子入りして、親分に面倒を見もらう代わりに、三年間は絶対親分の言うことに従って生活します。ただ、鉱山労働者はいろいろな鉱山を移動していく特徴があつて、三年間が過ぎたら、今度は紹介してみたいなものをもらって違うところでも働けるようになります。そういったある種、各地の鉱山で働く一つのネットワークというか、アソシエーションというものが友子制度です。絶対服従のような上下関係もあり

ますが、例えば働いていた人が亡くなってしまったら、残された家族の面倒も友子同士でみるなど、生活扶助の面も友子制度にはあります。

水口為和さんが一九八三年に書かれた「鉾山の民俗―友子制度を中心として」という論文に写真がありますが、昭和十三年の大仁金山、伊豆の大仁駅の近くにあるところですが、「友子取立の式」と書かれています（写真1）。この写真を見ていただくとわかるように、ずらっと人が並んで、かなり正装をしています。これを見て水口さんは「結婚式のようだ」と論文に書いていますが、まさにそのような儀式で親分と子分の契りを結び、そのあと一緒に働いていくのです。鉾山は大変危険を伴う職場だったので、そういう

関係性を結んで働いていくという民俗があったのです。そのような歴史を紐解いて論文に残していったのが水口さんという、まさに地域に住んでいらっしやる在野研究者だったとい

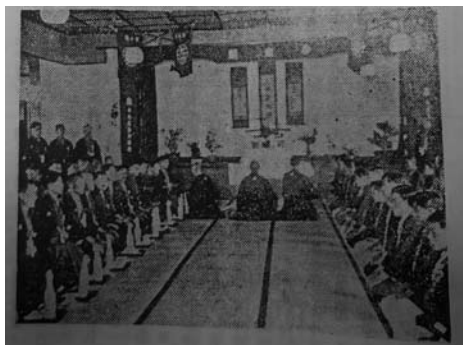


写真1 友子取立の式（昭和13年、大仁金山）  
（水口為和1983『鉾山の民俗―友子制度を中心として』『伊豆の郷土研究』8号、より引用）

うことになりませう。

実は最近、大仁金山に動きがあり、この大仁金山が今年（二〇二五年）の二月四日の静岡新聞に大きく取り上げられました。大仁金山は江戸時代には瓜生野金山と言われていましたが、昭和に入ってから再稼働したときに、大仁金山と言われるようになりました。大仁金山には遺構が残っていますが、今のところ文化財や史跡にはなっていないません。地域の方はこういうものがあるのをよくご存じなので、ここにどういう歴史があったのか、それをこの先どのように引き継いでいけるのかなど、地域出身の皆さんが「百笑ミーティング」という会を立ち上げて、調べていこうと活動しています。その様子を特集した記事です。

友子として働いている方の中でやり取りされる免状など、残された資料もたくさんありますが、これからの伊豆の金山の歴史を考えていくのに、まさに先ほどの水口為和さんのような、在野の研究者の研究が基礎的な資料になっていくと思います。

### 3 災害の現代民俗学

現代的なトピックとしては災害防災が挙げられます。講座の始めに、私は東日本大震災の研究をしたと申し上げましたが、静岡に来てからは伊豆半島でも災害の研究に

着手させていただいています。伊豆半島ジオパークの助成をいただいで、静岡大学情報学部望月美希先生という地域社会学の研究者と一緒に、西伊豆町で津波に関する研究をやりました。

東北地方は大体数十年に一度津波が来るといって、いわゆる津波常習地という言葉方をします。例えば、二〇一一年に津波がありました、その前には一九六〇年チリ地震津波、一九三三年に昭和三陸津波と、繰り返し津波が来ています。津波というのは繰り返し来るといふ部分がありますが、伊豆に関しては、特に近代になってから大きな人命が失われるような津波というのは起きていません。

一九二三年の関東大震災では、鎌倉など神奈川の方はかなり被害がありました、伊豆の方はあまり被害がなく、むしろ西伊豆町などの資料を見ると、逆に伊豆から出ていった関東の人たちを船で助けに行った、というような情報が出てくるくらいです。

では、津波に襲われたという伝承は全然ないのかというと、まさに今、南海トラフとか言われていますが、文献調査とフィールドワークをしたところ、西伊豆町内で約二十九件の津波伝承を集めることができました。出てきたのは一四九八年、中世の明応東海地震と一八五四年の安政地震など、近代以前に発生した津波に関する伝承が複数見

られたということで、直近で津波を経験した人に話を聞くことは無理であっても、言い伝えとか伝承というのはいろいろな形で残っています。

地震とか災害の歴史というのは、いわゆる自然科学の研究者も調べているので、例えば一八五四年の地震でどこまで波が来たかということ、ある程度わかってきてはいます。それに対して私たち民俗学者というのは、もうちょっと曖昧な、けれども確かにある言い伝えみたいなものに焦点化していく部分があります。

例えば、西伊豆の宇久須というところに城福寺というお寺がありますけれども、こんな伝承があります。

「ある年、伊豆の海に大きな津波がおそった。宇久須の里では、浜辺の家々も山すそにあった城福寺もあつというまに津波にさらわれてしまった。この津波のために寺でいたいせつにおまつりしていた大日如来さまも波にさらわれてしまった。」（『賀茂村の伝説』）

「ある年、伊豆の海に大きな津波がおそった」とありますが、これはある年なので、いつの津波かわかりません。この地域の方に聞いてみましたが、やはりわからないというのでした。いつかはわからないけれども、波が来てこ

のお寺が流されて、そのご本尊様も流されてしまったという事です。

地域で聞き込みをしてみたら、現在、城福寺は海沿いにありますが、伝承によると、もともとは「クリスタル博物館」があるあたりに、どうやらお寺があったらしいことがわかりました。博物館は今のお寺より少し高い場所にあるので、なぜあえて低い場所に移ったのか、と少し疑問に感じますが、とにかく今の場所ではない所にあつて、津波で移ったのだという言い伝えがあるのは、複数の人から確認できました。

実は、このように過去の津波に伴って、例えばお地藏様が移ったなど、信仰の場が流出したり移動したりという現象は、その他にもいくつか確認することができました。どこまで波が来ていたかということまではわからないのですが、津波が信仰の場という地域の皆さまが大事にしているものと結びついているという点で、こういった伝承を拾い上げて、伝えていく必要は十分にあるのではないかと考えています。それはさらに避難の問題とも関わってくるからです。

私が西伊豆町を歩いていたところ、いろいろな場所に「津波避難場所」という看板がありました。例えば、津波避難場所として「不動明王」や「弁天山」と書いてあります

(写真2)。「津波避難場所」

というと、小学校や役場などがイメージされるかもしれませんが、地域の方でなければどこにあるかわからないが、地域で祀っている方だったら「あそここの不動明王のところ」に逃げればいい」とみたいなことがわかるらしいのです。ローカルな信仰の場が避難場所に指定されていることが多いようです。これは東日本大震災でも

言われたのですが、比較的神社などは高い場所にあることが多く、そこが意外と避難場所として有効なのだそうです。もちろんそうではないケースもあるので一般化はできませんが、現代においても信仰の場と防災との関係性は非常にあるので、信仰の場が歴史的に過去の津波で移ってきたかもしれないという伝承と関連させて理解していく必要があるのだらうと考えています。これが西伊豆を歩いて非常に印象的だったことです。

他方で、田子の「不動明王」に実際に行ってみたのですが、



写真2 津波避難場所の「弁天山」(西伊豆町宇久須) (辻本撮影)

ドアが開いたままになっていて、あまり手が入っていないような感じがありました。やはり人口減少や高齢化によって、お祀りされにくくなるような部分もあるので、そういった部分も調査していく必要があるかと思っています。

このプロジェクトは今年の三月に一旦区切りをつけたのですが、中央大学の松崎和賢先生という情報学が専門の方とコラボさせていただいて、私が集めた伝承を全部A Iで読み込んでくださいました。最初はそんなことができののだろうかと思っただけですが、「西伊豆版」減災伝承A Iという、西伊豆町における災害の記録を、A Iの力で次世代に伝承するための教育に使えるアプリを作ってくださいました。例えば次のようなものです。

安政の大地震（一八五四年）の際、西伊豆町安良里の多爾夜神社たにやではどのような現象が起きたと言われていますか？

- A. 神社が完全に倒壊した
- B. 津波が神社まで到達した
- C. 神社の鳥居が流された
- D. 神社の周辺で地割れが発生した

正解はBの「津波が到達した」なのですが、こういうも

のを例えば子どもたちの教材にすることで、「ああそうか、ここの神社まで津波が来たのだな」と思えば、過去の災害を呼び起こすことができるということで、これは使えるなと思いました。これを実装するのが今後の宿題になります。

#### † 介護民俗学・地域福祉と現代民俗学

現代の地域課題というところで特に伊豆半島で挙げられるのは、高齢化と福祉の問題です。一見関係なさそうですが、そういった中にも実は民俗学が深く関わる道があると考えています。

#### 1 介護民俗学

介護民俗学という言葉を作った方が沼津で活動されています。六車由実さんという民俗学者で、もともと東北地方で研究をされたり、人身御供の研究でサントリー学芸賞を取られたり、民俗学の研究で活躍され続けてきた方ですが、大学を辞められて沼津で介護職に転職されました。今はデイサービスを運営されています。

大学の教員から介護現場に転職するのは非常に珍しいキャリアだと思われるかもしれませんが、六車さんはずっと介護現場で民俗学をやり続けていらっしやって、『驚き

の『介護民俗学』とか『介護民俗学という希望』、最近では『それでも私は介護の仕事を続けていく』という本も出されています。どれも非常におすすめの本ですが、これらのポイントには、介護現場では、例えばご飯を食べるとかお風呂に入るとか、生活のいろいろなことを若い人に支援してもらうようになるので、介護される高齢の方はやつてもらわなければならないと思います。

他方で、民俗学では高齢の方というのは、要は「先生」です。先ほどのように、昔の災害がどうだったのか、この神社はどうだったか、ということはお年寄りの方が知っていますから、六車さんは介護現場でも昔のことを利用者の方、お年寄りに聞いています。聞き始めると、急にお年寄りの方も生き生きして、昔のことを教えてくれます。そうになると、支援する・されるという固定化された関係性が逆転して、例えば「入浴は手伝ってもらわなければならない、民俗学については私が教えてあげる」となって、場がどんどんよくなっていくという、そういうことを言われているのです。まさに、介護とか福祉というところに民俗学が役立つということが、介護民俗学の中で言われていることです。

## 2 ふるさと絵屏風

今の話は介護施設での実践ですが、もう少し広げて、地域福祉というような話も最近よく言われています。高齢の方とか子ども、障害のある方なども含めて、どのように地域の中でコミュニティを作っていくかということが、これもまた人口が減っていく中で地域課題になっています。こうした中で、民俗学と非常に近い活動になりますが、「ふるさと絵屏風」というものがあります。

これは、滋賀県立大学の上田洋平先生が考案したのですが、大きさは非常に大きくて、スクリーンより更に大きいかもありません。例えば、昭和三十年頃の生活を聞き取って、民俗学であれば文章にして残しておいたりするのですが、それを絵にするのです。どこで農業をやっていたとか、どこで遊んでいたとか、そういうものを絵にして屏風にする、折りたたんで運べて、それをみんなで見ることができるとのことです。

このように聞き取ったかつての暮らしや風景を、住民が中心となって絵屏風にしていくと、実際に作るまでにいろいろな人がこの作業に関わらないといけないし、完成したら今度はそれを見て伝えることができるということで、これが地域福祉に非常に良い影響があると言われています。

この絵屏風の取り組みを上田先生は滋賀県内でやってい

たのですが、私の同僚の内山智尋さんという地域福祉を専門にしている先生が非常に魅力に感じられて、松崎町でもやろうということで、松崎で絵屏風を作るプロジェクトがもう一年ぐらい進んでいます。内山先生は静岡大学の東部サテライトにいらっしゃいますが、去年は上田先生をお呼びして、実際にどうやって作るのか、セミナーを開催されています。絵屏風を作るためには、昔どういう暮らしをしていたかという話を丁寧に聞き、それを絵にすることになるので、これも広い民俗学的な部分で役に立てるところなのかなと思っています。

#### まとめ

山中共古や柳田国男、宮本常一、洪沢敬三など、民俗学の初期から静岡県東部にはたくさん研究者が入っていました。今回取り上げられなかった研究者もたくさんいますが、静岡県東部はかなり豊富な民俗学の蓄積がある地域だということは確認できます。

他方で、そのように民俗学にとって非常に魅力的な地域であるということとまさに裏腹だと言えると思うのですが、宮本常一が言っていた「調査地被害」ということは忘れてはいけないと思います。

これは民俗学に限らず、もともと人文学、さらには学問全体といってもいいかもしれませんが、地域との連携なくしてはあり得ないということを忘れてしまっては、つまり自分たちの研究のためにやるということだけ考えて、その成果を地域の方にちゃんと説明しない、返さないということが続いていけば、一方的に研究者が知識を奪ってしまっただけになってしまいます。しかも、どんな人ばかり来て、結局何だったのかわからない、こういう調査研究を宮本常一は「調査地被害」と言いましたが、これは決して過去の問題ではなく、常に私たち研究者が考えていかなければいけない問題であると思います。

また、現代の可能性というところでは、例えば、ジオパークに見られるようにまだまだ新しいテーマ、災害に関する研究もそうですし、金山の研究はあまり民俗学がやってこなかった研究ですが、むしろ地元在住の研究者、水口為和さんのような方が先鞭をつけて研究をしてきたことが、今まさにまだ整備されていない遺構をどのように整備しているかという検討にも使われることになっています。

災害や福祉などの地域課題を直視する現代民俗学の可能性は、今後どんどん広がっていくでしょう。そういう意味では、研究者が一方的に調べるというよりは、地域にある課題と連携して民俗学者と一緒に何をやっていけるのか、

ということを考えていかなければならないと思います。先ほどご紹介した介護民俗学とか、ふるさと絵屏風のようなものからは、そういった可能性が既に着手されているということが言えるのではないかと思います。

そう考えたときに静岡県東部というのは、日本の民俗学の初期の足跡がつけられたところであり、かつ最先端の試みまでが凝縮されている地域であるということで、今回の機会にぜひ皆さんに民俗学に関心を持っていただき、そして、民俗学というのは専門的に大学で勉強することもできますが、一方では誰でも今すぐに始められるものでもあります。という、非常に参入のハードルが低い学問でもあります。働きながら研究されている方もむしろ多いので、たくさんの方に関心を持っていただけると嬉しく思います。

最後に、洪沢敬三が療養中に出会って編纂した『豆州内浦漁民史料』の中にある文章をご紹介します。

「これを通覧して、この内浦から見る富士山の美景どころかその存在すら一言半句も言及していないのは実に意外であった。…本文書を研究するに当たっても地図を開かず、また実地を見ないなら、あの国立公園にも一度擬せられんとした駿河湾の絶景は想像もできないであろう。こう考えると本書は、あまりに常に見るも

の常に為すことは記録されず何事かの事件のみ書き記される歴史の影をまざまざと見せている如き気がする。

一方、学問においても社会的な仕事において日常の何でもないことを忘れてはならないという反省を起さずにはいられない気がするのであった。」（『豆州内浦漁民史料』序）（『洪沢敬三著作集第一巻』）

「これを通覧して」、の「これ」というのは、沼津の内浦で出てきた膨大な古文書です。漁業の記録ですが、その古文書を洪沢敬三は若い研究者と一緒に解読して、それを資料集として出版したのです。洪沢敬三は、データを分析して論文を書くより前に、まずは資料をちゃんと残し、それを世に出していくことが必要だということも言っています。が、この資料を通覧して、「古文書をいくら見ても内浦から見える富士山がきれいだとか、富士山が見えるとか、富士山があるということは一言も書いていないのが意外だ」と書いているわけです。内浦というところは、僕が行ったときは曇っていて見えなかったのですが、おそらく駿河湾越しに富士山が大変きれいに見えるのかなと思いますが、この地域の人たちにとっては、富士山があるのが日常なので、いちいちそんなことを文字にしない、ということですから古文書には出てこないんだ、ということを洪沢敬三

は言っているのです。富士山が見えることは当たり前すぎて書かないけれども、最初に申し上げたまさにトリビアルなこと、当たり前すぎて書かないみたいなことこそ、実は忘れてはならない何かがあつて、それを突き詰めていくのが民俗学ではないかということです。

私ももう引越してきてしばらく経ち、富士山が見える日常に少し慣れてきてしまいましたけれども、当たり前前のことを改めて反省してみるのが民俗学の効力だということ、洪沢敬三はこの沼津の地から、八十年も前に言っていたということ、改めて皆さんと共有させていただければと思います。

#### 質疑応答

**質問**——少し教えていただきたいのですが、話の中で三嶋大社がでしたが、三島の地名と島の字が違います。鹿島でも鹿嶋神社と地名で島の漢字が違うというのは、どこからきたのでしょうか。

**辻本**——私もあまり詳しくなく弱いところなのですが、神様の名前としては山偏が付くのが正しいということになると思います。それと地名がなぜずれているかまでは私は存

じていないのですが、確か、三宅島にある神様の名前も山偏の字であったように思います。明確な答えではなくて申し訳ありません。

**質問**——資料の中にお盆の時期について書いてありますが、このお盆というのは地域ごと、人間の行動によってだいぶ違う形にとられているのではないかと思います。また、このお盆というのは全国的に宗教とくっついていますが、実際のところ、このお盆というのは、宗教とくっついたものから発生しているものが多いのでしょうか。お盆になると坊さんがお経をあげますが、こういう行事が日本全国みんなそうなのか、あるいはある区では踊りを踊ったりしているようなところもあるようにテレビでやっています。お盆のことについて、地域的にどんなお盆の暮らしをやっておられるか教えていただければと思います。

**辻本**——お盆の一般的な説明として、日本では「山中世界観」という考え方があります。人間が亡くなると山のほうに靈魂が行くという考えで、それがお盆になると戻ってくるということとお盆にはお供え物をしたり、いろいろな形のもの、例えば舟や牛のような乗り物を作ったりします。先祖が戻ってくるという考え方があり、そのために何かす

るということが、各地のお盆の行事につながっているのかなど思います。

私が暮らしていた青森県は、お盆の時期にスーパーに行くところ先祖様用のお弁当が売っているのです。「法界折」と言いますが、「折」とは折詰弁当のことです。精進料理のように肉を使わないお弁当が売られていて、それを供えるということになります。意味としては、ご先祖様と一緒にものを食べるということです。私たちも一緒にご飯を食べたりすると思いますが、それを亡くなった人と食べるのです。お供え物をするという点では、各地で行われていると思います。特に青森とか沖繩では、実際にお弁当をお墓の前で食べるようなことが行われていたりします。

そう考えると、先ほどの山から戻ってきたご先祖様の魂を迎えるとか、あるいはそのとき何か一緒に食べるとか、そういう要素は共通している部分が多いのですが、実際に墓地で一緒にお弁当を食べるとか、スーパーでお盆用のお弁当が売っているとか、そういうところが青森県の特徴であるといったところを細かく調べていくのが、民俗学者がやっていることかなと思います。十分なお答えではなかったかもしれないですが。

**司会**——この機会に何か普段思っていらっしゃること、今

回は特に日常と文化ということですので、普段の文化生活の中で、これはうちのほうではこうやっているけど、何でこうやっているかわからない、というようなものもあつたら、発言していただけたらと思います。先ほどお盆の話もありましたけど、それ以外の生活習慣、民俗みたいなところであつても、それ以外でも結構ですが、いかがでしょうか。

**参加者**——お盆というと、私の地域は七月三十一日と八月一日の二日間で晦日盆とか言われているのですが、いつの日か養蚕、お蚕さんのおかげでその時期になったと、親から聞いていますが確かなことはわかりません。

**辻本**——私も「修善寺の方で八月の一日とかにやっているところがある」というような説明を聞いたのですが、その養蚕の時期と競合しているのかどうかということ、個人的には検証してみたいと思っています。

よく言われるのは、旧暦でやるか新暦でやるか、というパターンがあると思うのですが、多分、七月の末とか八月の頭にやるというのは、新暦旧暦とは違う要素が入ってきたと思うので、教えていただいてありがとうございます。どちらの方ですか、東部でいらっしゃいますか。

**参加者**——伊豆の国市ですが、伊豆の国市でも、歩いて数分のところが八月の十五日だったりなどいろいろです。

**辻本**——そんなに違うのですか。大変興味深いです。ありがとうございます。

**質問**——先ほどのお盆の話で法界折とおっしゃった青森でお墓の前でお弁当を食べる習俗について、沖縄でもお墓の前で飲食されることですが、それは講座1で紹介された「言語の伝播」と同じような考え方をしているものかどうか、先生の今のお考えがお聞きできたらなと思います。

**辻本**——私もそう考えなくなる部分はある一方で、やはり沖縄と青森のお墓参りは明確に違うところがあります。お墓の大きさも沖縄はもう少し大きかったりしますし、それから、青森ではいつお墓参りしてもいいみたいな感じだと思っておりますが、沖縄では決まったタイミングでお墓参りをするというように、ルールも違う部分がありますので、先ほどの「方言圏論」とは少し違う部分はあるのかな、と思います。

また、お弁当になったというのも青森では比較的新しい

ことで、昭和四十年ぐらいといわれています。お弁当でお供えするというと古そうに見えるのですが、持ち運びが便利だったり、スーパード売られるようになったからということ、わりと新しいという説もありますので、比べてみるとときには、それがいつぐらいから行われ出したのか、といったところもポイントになるかなと思います。

# 静岡大学公開講座ブックレット

地域創造教育センターでは、二〇〇八年度より、『公開講座ブックレット』の刊行を開始しました。当センター主催の公開講座の記録を講演録という形でまとめて発行するというものです。公開講座を実施してそのまま終わりにするのではなく、記録として残し、公開していくことによって、知の蓄積と共有を図ろう

と考えています。

これらのブックレットは、静岡大学附属図書館や静岡県内の公共図書館で閲覧することができます。また、静岡大学学術リポジトリ (<https://shizukareponi.ac.jp/>) でも公開しています。

## 1 身近な自然環境・里山との付き合い方

富田 昇「里山の性格とその変貌——史料に残る山林利用の変遷」  
小嶋陸雄「海岸林と人の共生関係論」  
小南陽亮「里山の自然環境——生態学からみた里山の森林」

2009年3月刊  
74ページ

## 2 浜松の戦争遺跡を探る

荒川章二「浜松の陸軍基地」  
村瀬隆彦「浜松空襲について」  
竹内康人「浜松の戦争遺跡」

2009年11月刊  
76ページ

## 3 高齢化社会における地域とまちづくり

中條暁仁「高齢者は弱者なのか？」  
矢野敬一「祭りを継続させる・町屋のまちづくりを立ち上げる」  
南山浩二「家族・地域社会のゆくえと高齢者介護」

2010年3月刊  
72ページ

## 4 いま、再び〈いのち〉を考える

松田 純「検証生命操作の現在」  
田島靖則「検証いのちの「はかなさ」をめぐる」  
石川憲彦「検証現代人に突きつけられた生と死の課題」

2012年1月刊  
62ページ

## 5 〈いのち〉と環境を考える

宗林留美「海のしくみと駿河湾深層水」  
松田 純「遺伝子技術のゆくえと〈いのち〉の現在」  
芳賀直哉「いのちの森を守る闘い——南方熊楠の思想」

2012年3月刊  
74ページ

## 6 沼津の古代遺跡を考える

滝沢 誠「古墳出現期の沼津」  
篠原和大「農耕文化形成期の沼津」  
菊池吉修「古墳時代後期の東駿河の様相——埋葬施設からみる特徴」

2012年3月刊  
68ページ

## 7 食と健康を科学する

竹下温子「食の安全・安心を考える」  
木暮暁子「食とバイオサイエンス」  
日野真吾「食物繊維の効能——免疫とアレルギー」

2013年3月刊  
92ページ

# 静岡大学公開講座ブックレット

## 8 災害を知り、防災を考える

鶴川元雄「火山噴火予知の方法——富士山の現状を考える」  
原田賢治「静岡の津波防災を考える」  
北村晃寿「大地が伝える津波と地震の記憶——静岡伊豆の堆積物調査から」

2014年3月刊  
96ページ

## 別編 世界文化遺産富士山を考える

小山真人「富士山 大自然への道案内」  
増澤武弘「文化遺産を育て守る富士山の自然」  
和田秀樹「富士山の美を作る生い立ち——生の姿と富士の恵」  
小二田誠二「眺める富士山——景観と表現」  
湯之上隆「霊峰富士の宗教文化史」

2014年11月刊  
114ページ

## 9 〈生きる〉を考える

松田 純「変貌する身体と生命」  
丑丸敬史「老いを科学する」  
久木田直江「医療と身体を考える」  
竹之内裕文「〈死〉とともに生きる」  
白井千晶「生むこと、生まれること」

2016年3月刊  
131ページ

## 10 ふじのくにのホモ・サピエンス

山岡拓也「ホモ・サピエンスの技術と能力とは何か——世界各地で明らかにされている現代人的行動」  
池谷信之「人類史最古の遠距離航海と土木工事——神津島産黒曜石と陥穴猟」  
山岡拓也「三万五千年前のハイテク狩猟具——台形様石器の実験考古学」

2018年3月刊  
70ページ

## 11 静岡の自然と文化

——東部・伊豆半島を中心に——

小山真人「世界遺産・富士山と伊豆半島ジオパーク」  
白井嘉尚「地域力×アート——静岡での試み」

2021年3月刊  
52ページ

## 12 リスクに向き合う

村越 真「私たちの周りにおけるリスクとそのマネジメント」  
鳴海哲夫「化学のチカラで感染症に立ち向かう」  
塩田真吾「ネットのリスクをどう教えるか」  
鈴木哲朗「感染症のリスクに向き合う」  
朴 龍洙「感染症ウイルスを測る」

2022年3月刊  
119ページ

# 静岡大学公開講座ブックレット

## 13 静岡の自然と文化―県東部を中心に―

遠藤大介「ジオサイトからたどる沼津・三島の大地の歴史」  
篠原和大「駿河湾沿岸地域の農耕文化の形成」

2023年3月刊  
39ページ

## 14 静岡の自然と社会 ―県東部にスポットをあてて考える―

杉山康司「裾野市におけるスポットを活かした地域活性化への取り組み」  
阿部耕也「地域と大学が共創する学びとコミュニティ」  
小林 淳「富士山の生い立ちと麓にもたらした湧水の科学的特徴」  
山岡拓也「愛鷹山麓の遺跡の考古学研究で明らかにされている初期現生  
人類の技術と行動」

2024年3月刊  
94ページ

## 15 変わりゆく自然と私たち

カサレトベアトリス「駿河湾の自然と生態系とサクラエビ―その特性」  
川原博満「気候変動への対応と私たちのくらし―緩和策と適応策」  
伊藤 舜「野生生物から見た気候変動」

2025年3月刊  
78ページ

## [講師紹介]

### 堀 博文（静岡大学人文社会科学部教授）

1968年三重県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。専門は北米先住民諸言語の一つハイダ語の記述研究。主な論文：「複統合的タイプにおける『語』—ハイダ語（北米先住民諸言語）の場合」（沈力編『類型論から見た「語」の本質』ひつじ書房，2023年），Verbal classifiers in Haida（『言語研究』第162号，日本言語学会，2022年）など。

### 辻本侑生（静岡大学地域創造教育センター講師）

1992年神奈川県生まれ。放送大学大学院文化科学研究科修士課程修了（修士（学術））。民間シンクタンク研究員、弘前大学地域創生本部助教を経て、2024年より現職。近年の著作に、『生きづらさの民俗学』（共編著、2023年、明石書店）、『クィアの民俗学』（共編著、2023年、実生社）、『3STEP シリーズ 民俗学』（共編著、2026年、昭和堂）などがある。

静岡大学公開講座ブックレット16

## 静岡の言語と民俗

～県東部にスポットをあてて考える～

発行日——2026年3月24日

編集・発行——静岡大学地域創造教育センター  
〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817

印刷——大日三協株式会社

表紙画像提供——辻本侑生

